北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年七月十五日印刷納本
昭和十七年八月一日發行（毎月一回一日發行）第三十九號

現地編輯

8

中元節

舊暦の七月十五日、中元は墳墓を清掃して祭祀をする日である。これは北魏時代から既に行はれた

この日は黄昏ごろから子供達は蓮の葉で作つた蒿子燈に燈を點じ、「荷葉提燈、荷葉提燈、今日は火をともし、明日は投げ棄てる」と唱ふのである。燈火が闇にきらめいて飛び交ふ螢のやうである。街では種々な色紙で、蓮花、蓮葉、花籃、鶴、鷺其他色々な形の提燈を賣り出す。これを蓮花燈といふ。また、荷葉燈といふのがある、これは蓮の葉の上に蠟燭を立てて、ともすものである

この日各寺院では法船といふ色紙製のきれいな船をつくつて、晩になるとこれを焚いてしまふ。これには長さ數丈にも達するものがある。法船は先亡諸靈が供養を受ける爲に往來するときの乘物であり、燈籠をともし、法會の後河中に流すのである

これ等の行事は河邊だとか水とかに關係の深い土地に發生したことが察せられるが、而も時恰も夏期に屬し、涼味をさそふ水邊はかかる風習の擴大性を有したものと解せられる

また寺院では盂蘭盆會を催し、燈をともし、經文を念じ、幽冥に沈淪して極樂に行くことの出來ない者を濟度するのである。佛典に「目蓮＝釋迦十六弟子の一人＝は彼の母が餓鬼の中に生れ返つて食べることが出來ないので、釋尊は盂蘭盆會を七月十五日に催さしめ五味百果を盆中に盛り普く十方の大德等を供養し、而る後に目蓮の母にも食を得せしめた。そこで目蓮が釋尊に向ひ——凡て佛弟子の中で親孝行の者は盂蘭盆會の供養を行はなければなりますまい——と申し上げると釋尊は——大いに善し——と答へた。それで後世これに從ふのだ」といふことである

蓮花燈に集ふ小孩子たち

燈籠流し——北京北海にて——

北戴河 一

青島と共に北支の有する海の、避暑厚生地の双璧である北戴河は北京、山海關間の鐵道京山線の北戴河驛に分岐する十粁の海濱鐵道の終端にある。海濱風景區と稱されて、その面積十平方邦里、水浴場、運動場、華北交通直營の海濱賓館を初めホテル十餘、別莊六百、東亞旅行社の案内所、その他の行樂施設は勿論、醫院、郵便局、電信電話局、發電廠等に至る一般施設も特にこの地區の爲に設けられて遺憾がない。風景區には直接、避暑客を相手にしない商業も工業もない。即ち北戴河は純然、避暑厚生の別天地で、區域から一歩出れば全くの田野である。從つて青島の海岸が人口六十餘萬の大都市を背景にして、現代人の生活様式に宿命された「都市」を感覺することが出來るに對し、ここ北戴河は野趣に浸り幽寂を愛するに好い。想ひ回せば北戴河海岸は英國が北支進出の觸手であつた鐵道、

寶石、指輪などを海岸まで賣りに來る、にせ物に御用心

現在の京山線の建設に關係した英人技師キンダーなる者が今から五十年前に發見して以來のものであり、謂はば英國の北支侵略の副産物でもあつたわけである。しかし、大東亞戰爭以來わが物顏にふるまつてゐた英米人の姿は今日では見られなくなり、曾つての外人の天地は次第に日本のそれに移行しつつある

樂しい濱のひととき

北戴河 二

Leica

一

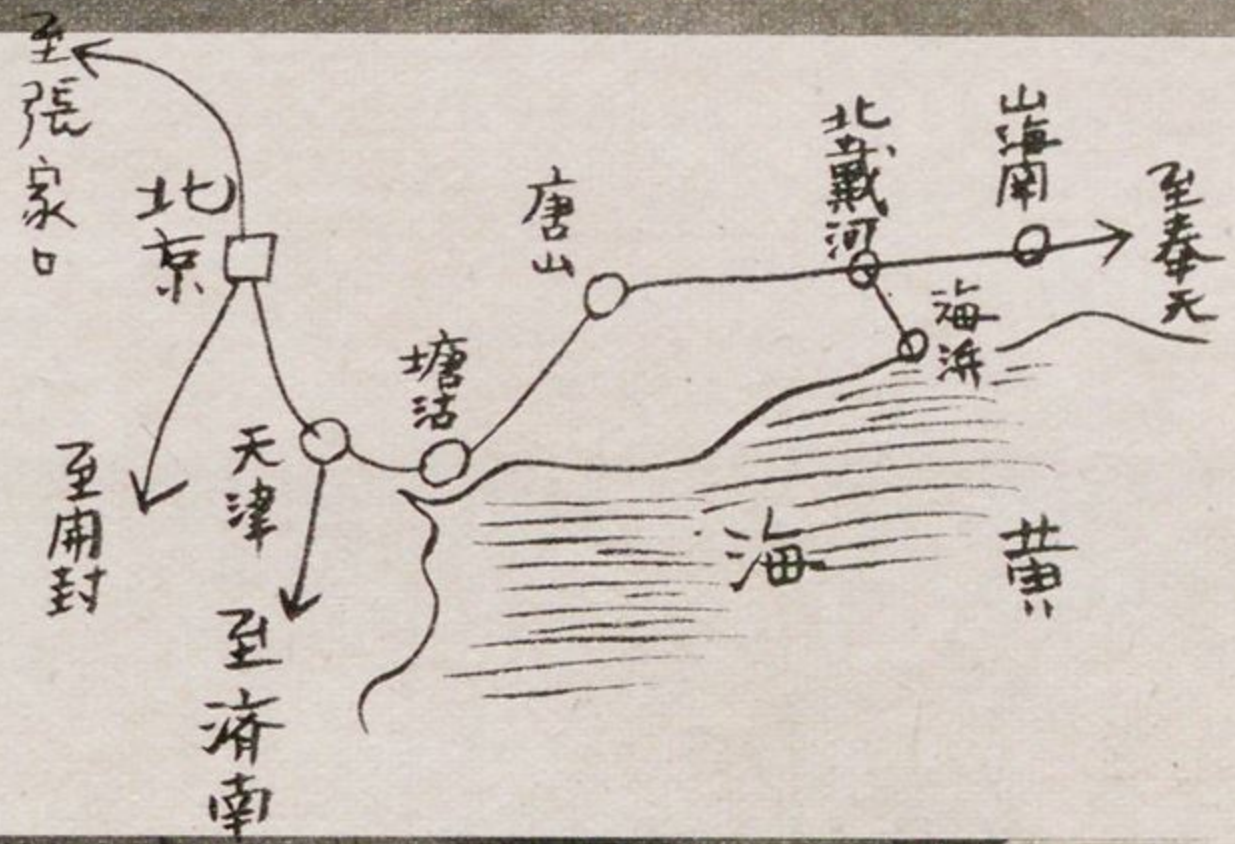
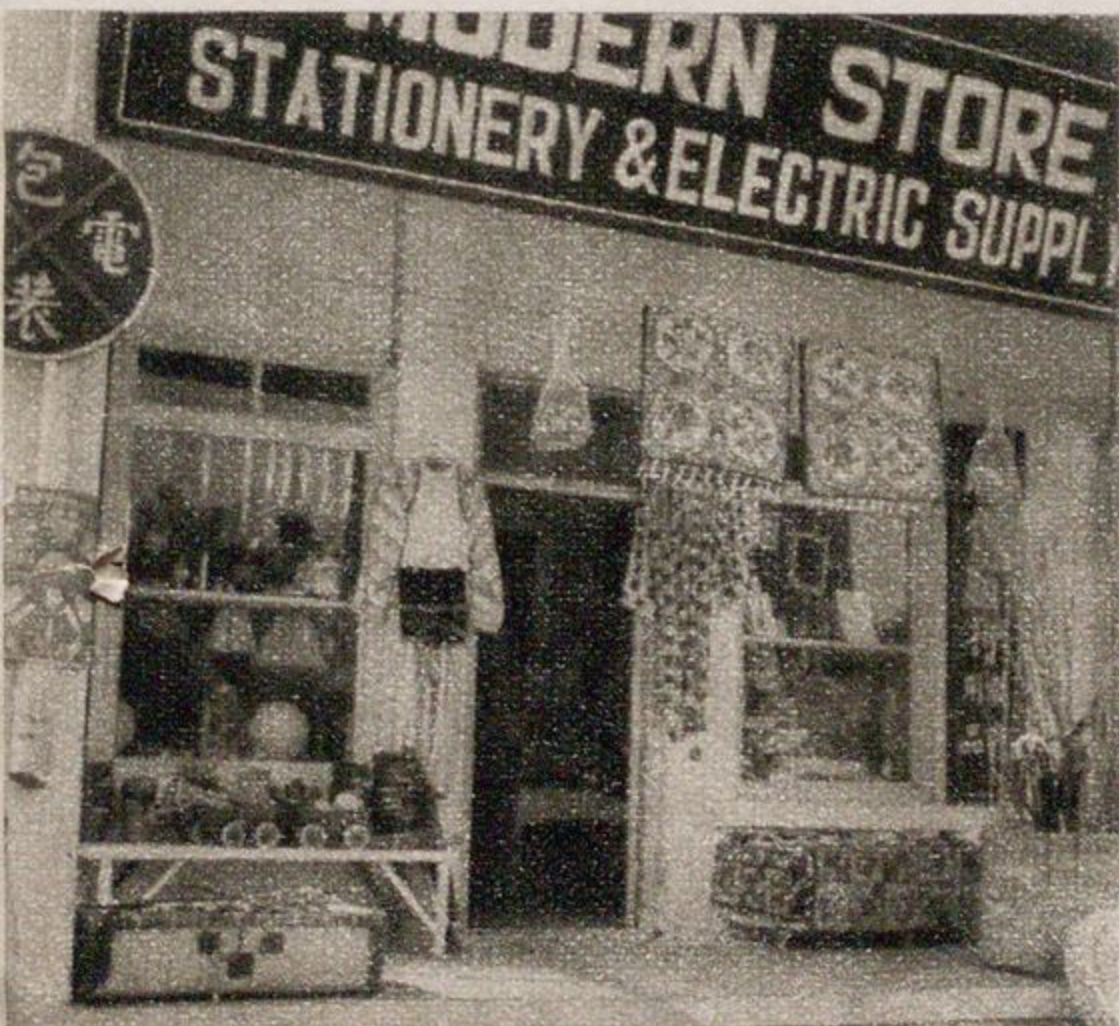
至張家口
北京
至開封
天津
至済南
塘沽
唐山
北戴河
山海関
至奉天
海濱
海
黄

三

MODERN STORE
STATIONERY & ELECTRIC SUPPLY

四

WAITING ROOM

二

五

六

一、山の手風景——商店街

二、海濱驛列車發着時の賑ひは、ちやうど人種展覽會のやうである

三、海へ

四、或る店頭

五、驢馬で颯爽と

六、脫衣場の風景

影戲の舞臺は組立式の簡易なもので、白い幕に裏から燈(あかり)(都會地でなら電燈、田舍なら油燈)をともして人形の影を映すのである。スクリーンの大きさは疊一枚くらゐであるから、あまり大勢で觀ることはできない

人形は幕の裏からすりつけるやうにして操るのである。演出と伴奏合せて十人くらゐが渾然一體となり、幽雅な音樂に連れて人形に燈光が透され戲がはじまると、すすけた人形達は生彩躍如として浮びあがり、あたかも生あるものの如く活躍しはじめるのである

影戲（かげゑしばゐ）

一

これを觀る場所や季節は別に嚴格なおきてがあるわけではないが都會地でなら、夏の夕涼みどき、院子の一廓で、田舍でなら、秋深い村外れのかけ小屋などで觀るなら申分ないであらう
寫眞のうち、龍は紙製、他は全部、驢馬の皮である。首は、すげ替へることができる

影戯

二

三

一

四

影戯の起源に就いては諸説區々として一定しない。漢の武帝が布帳に李夫人の影をうつしたことがその濫觴であるとも云ひ、また印度からビルマ、ジャバ、タイを經て、北宋に傳つたとか。一説には、明末、曹振中といふ河北省灤縣の人が、志を當時に得ず、奉天省遼陽に於て自ら布帳の講壇を設け、世風の頽廢をなげき、古來の道德故事や因果故事を韻文で寫し出し民衆を誨へんとしたが、なほそれでも多數の民衆を引きつけるに足らず、影戯を講談に配してみたり、また、木魚を敲いて歌つたり、その後、色々な樂器をとり入れて、今日の體裁を整へるに至つたといふのである

これに使用する樂器は、四根絃、南絃子（三味線）月琴、匣琴、大小銅羅、掌鼓（牛皮）小喇叭、横笛などである

劇本の作者は多く無名氏、これに印本と鈔本の二種があり、その種類は數百種に及ぶであらう

しかし影戯藝術も、時潮の波に揺られてまさに斷末魔にあへいでゐる。今、北京でも、街頭ではめつたに觀ることは出來ない

一、二、舞臺

三、芝居の臺本

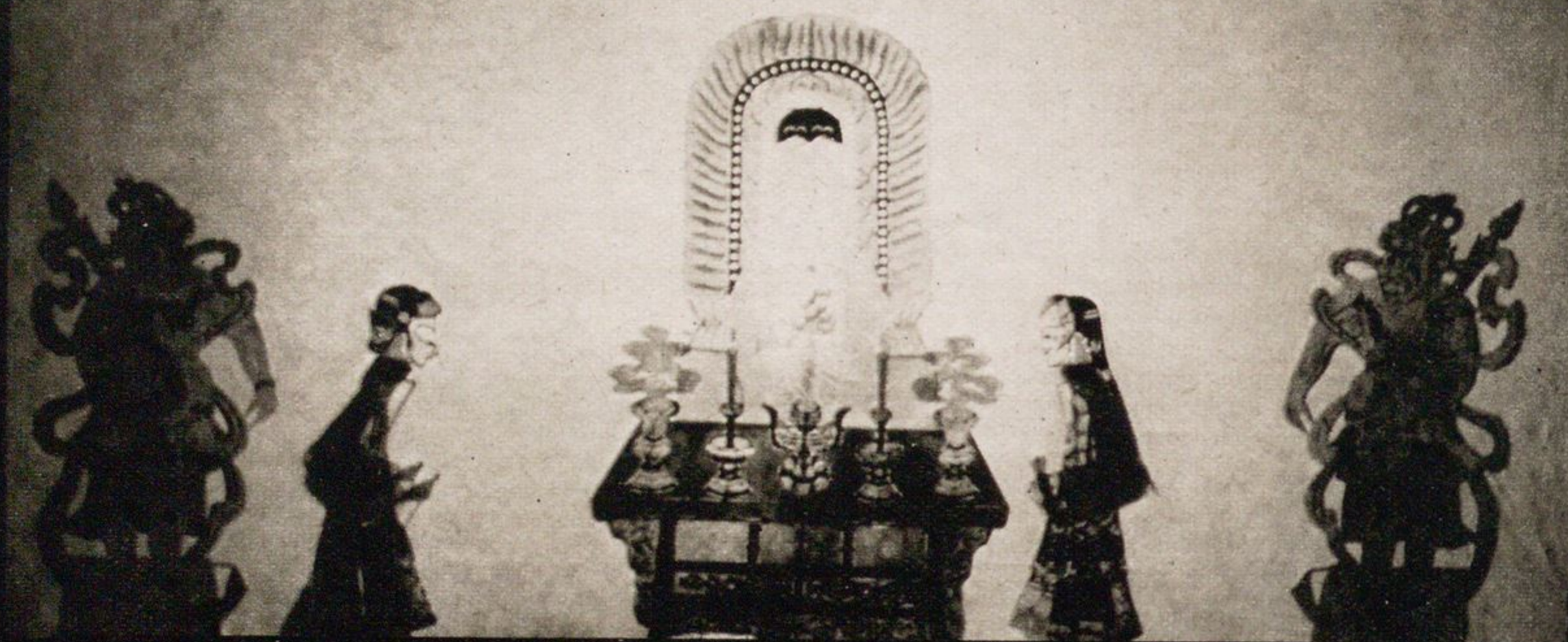
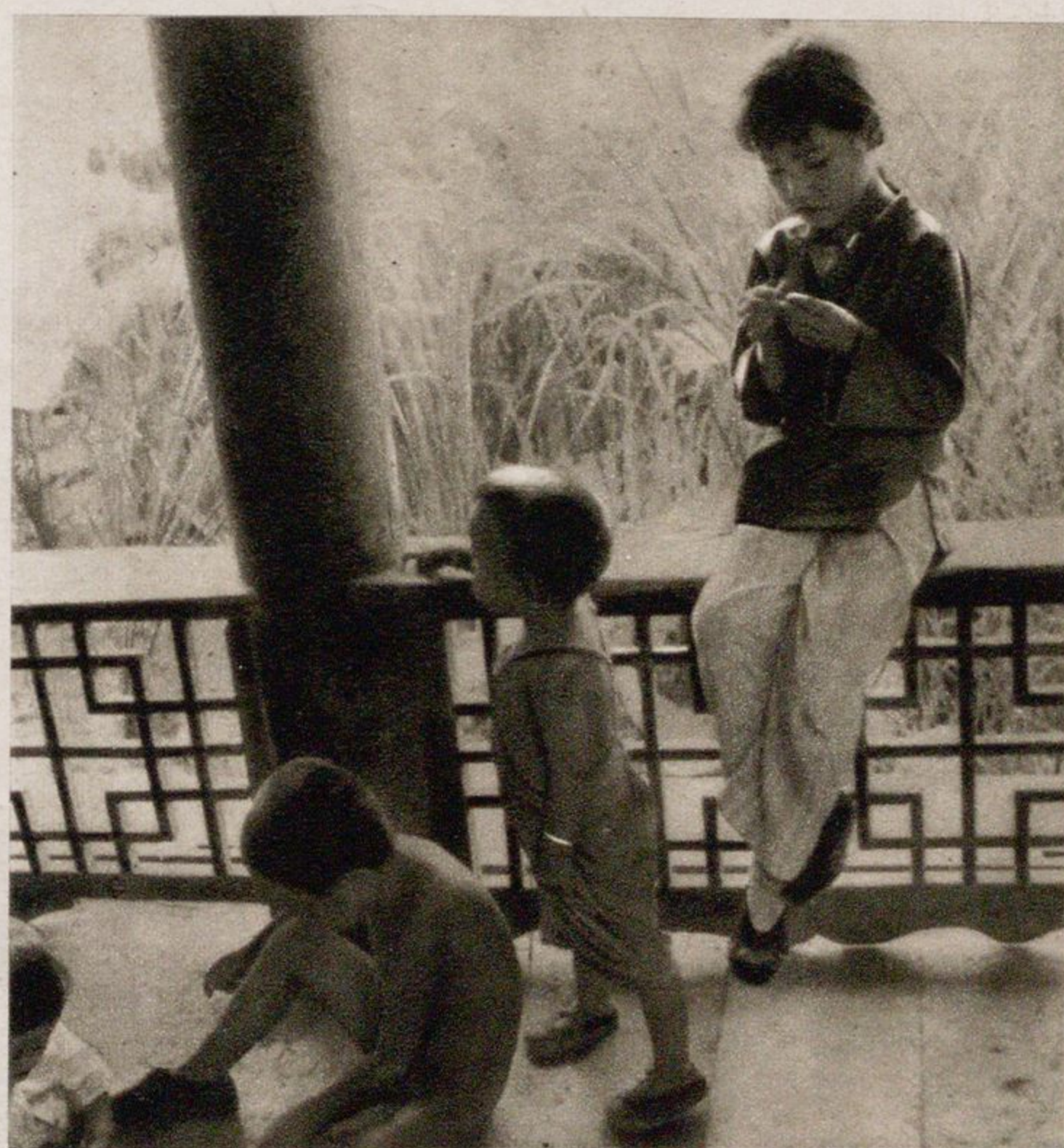
四、舞臺裏、演戯いまや酣である

五、觀るほどに、食べるほどに、夜の更けるのも忘れて

二

五

水清き大明湖

花あむ少女

大明湖

濟南

濟南は水の都である。水源は、彼の有名な泰山に續く山波である背後の、石灰岩の大山塊である。山東半島を跨いで幾度か、その河口を或は渤海に或は黃海にもとめた氣紛れな黃河の、而かも泥水が當てにならなかつたに對し、この石灰岩塊に生じた斷層を傳つて湧出する清冽な水は枯渇することを知らず、やがて春秋戰國以來の歷史を有する今日の人口六十萬の大濟南を育成する重要な原因をなした。湧水は古來、七十二泉の稱があるが、その呼物は趵突泉を首め、太公望が垂釣の遺趾と傳へられる黑虎泉、それに寫眞の大明湖である。趵突、黑虎の兩泉が水を、湧出するに對し、この大明湖は「濟南に七十二泉あり、滙して明湖となる」といふ昔人の言に依れば、水を吞溜するところに、一應その性格があるわけであるが、必ずしもさうではなく、湖內の湧水また豐富である。內外の二城がある濟南城の、內城の東北部を占めて周圍約四粁、湖畔には漢代の客亭、唐代の歷下亭以來、各代を通じて多くの臺閣榭亭が營まれた。詩聖杜子美が李北海と宴燕したとの傳へ話に名高い歷下亭は湖中の島にある。一帶は史話、傳說に彩られて四時の行樂に好く、特に夏季、綠柳靑蓮に畫舫を浮べての淸遊は樂しい

畫舫のお客さん

氷盞(びんつあん)

チンタツタチンチンタタ…氷盞の音は夏の感觸に快いリズムを與へます。氷盞と云ふのは眞鍮作りの酒杯みたいなもの二ツ、片手に持つて調子をつけて打ち合す、冷たい飲物賣の屋臺店で鳴らすものです

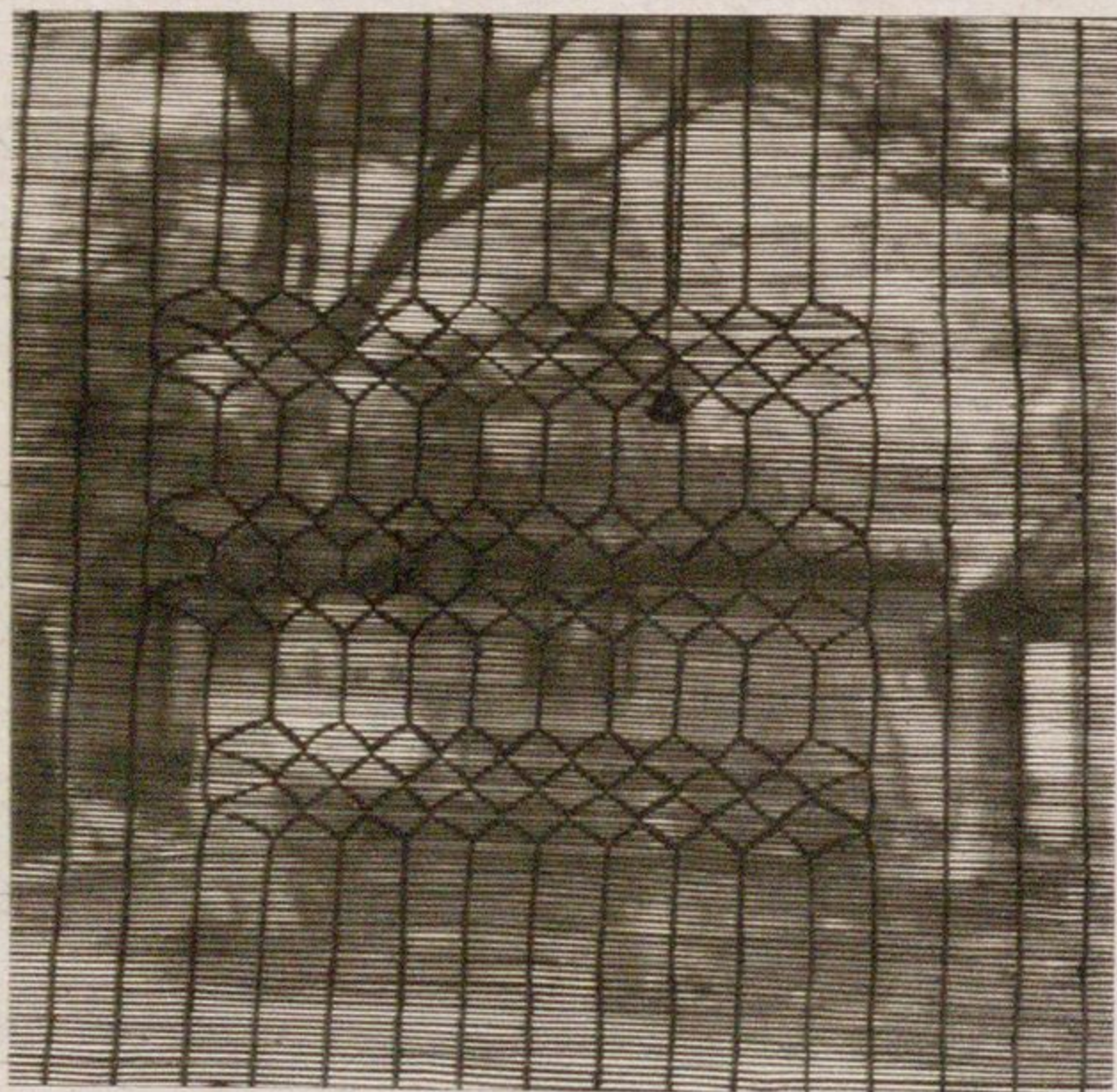
眞晝間の槐の樹蔭から洩れ聞えるのもよいし、夜更の胡同に聞くのもよい。布棚と氷盞と酸梅湯はもはや私等の骨身に浸みてゐるので北京を一度離れてみたら、切ない郷愁を呼ぶでせう

葦簾をつくる――開封にて

すだれ

北支の夏は日が激しい。燒つく日ざしを見ると誰もすだれがほしくなる

右圖、日よけのよしず編み

このやうに一人で編むものと、地上に平に經糸を張り、三、四人で編むもの（北京附近）とある。軒先や、天棚に使ふもの

左圖上、すだれ

暑くなると、どこの家も部屋の入口の綿簾はいつか涼しげなすだれ（簾子）と替る

左圖下、すだれ（部分）

よい竹の少い北支では、内地で見るやうな編みの細かい、薄手のすだれは少い。竹質のやはらかい爲もあらうが、どれも太く、粗朴である。編糸も百姓が手で紡いだ太い撚糸が多く、たいてい紺色に染めて編む。雨ふりには紺木綿の布をつけて端をまもる

平編み、龜甲編み等、編形にも樣々ある。編みの荒い爲もあらうし、竹の少い爲もあらうが、古びると年々古い竹を編み替へて使ふ

集團輸送——大運河

運河

一

一

小清河風景

支那の運河の歴史は春秋の昔までさかのぼることができるが、隋代煬帝の築造が史上最も有名である。彼は運河によつて南北の物資を都に集めるのに大きな便宜を與へたのである

中支杭州から北京（現在は通州まで）に通ずる大運河は長城と共に世界的に知られてゐるが、其他大小無數の運河は北支の大平原を縦横に走り、その交通、輸送、治安上に於ける役割はむしろ大運河の重要さに優るとも劣らぬものである。陸上交通の發達した今日に於いても、その重要性は微動だにするものではない

運河は奥地との交通に便利であり、また物資の交流が盛んであるために、敵側にもこれを大いに利用されたものであるが、今次の大肅正戰によつて敗殘兵はその後を斷つにいたり、いまや運河の一切をあげて北支建設に突進することになつたのである

北支の交通一切を經營する華北交通では、鐵道、自動車の他にこの內河水運の全沿岸六千キロに水路愛護村を實施し、すでに好結果をあげてゐる

なほ運河地帶の産物の主なるものは、棉花、棉實、豆類、米、高粱、小麥、落花生、葦、果實等である

舟の招牌(カンバン)は帆柱の先に

運河の舟で生活する人々はその殆んどが青幇(チンパン)といふ秘密結社の組合員である　これは清朝雍正の頃、南方から北京地方へ糧米輸送に從事してゐた勞働者の自衞團のやうなものであつたが、昔から支那は斯ういふ團體が芽生えるのに理想的な國土であつたのであらう、團體は遂に結社となり、非常に强靱な組織が成長し擴大されていつた、今日では本部を海上におき、揚子江沿岸は勿論北支滿洲までも及んでゐるのである　彼等には「義氣千秋」といふ嚴しい掟があつて、その內容に就いては彼等自身絕對に秘密を守つてゐるので窺ふべくもないが、表面は幇員の相互扶助を本義とし、慈善、慈愛、慈悲を本旨として暴を諫め、弱きを扶け、强きに怖れず、死を誓つて幇規を遵守して行を正すことに努めてゐるのである

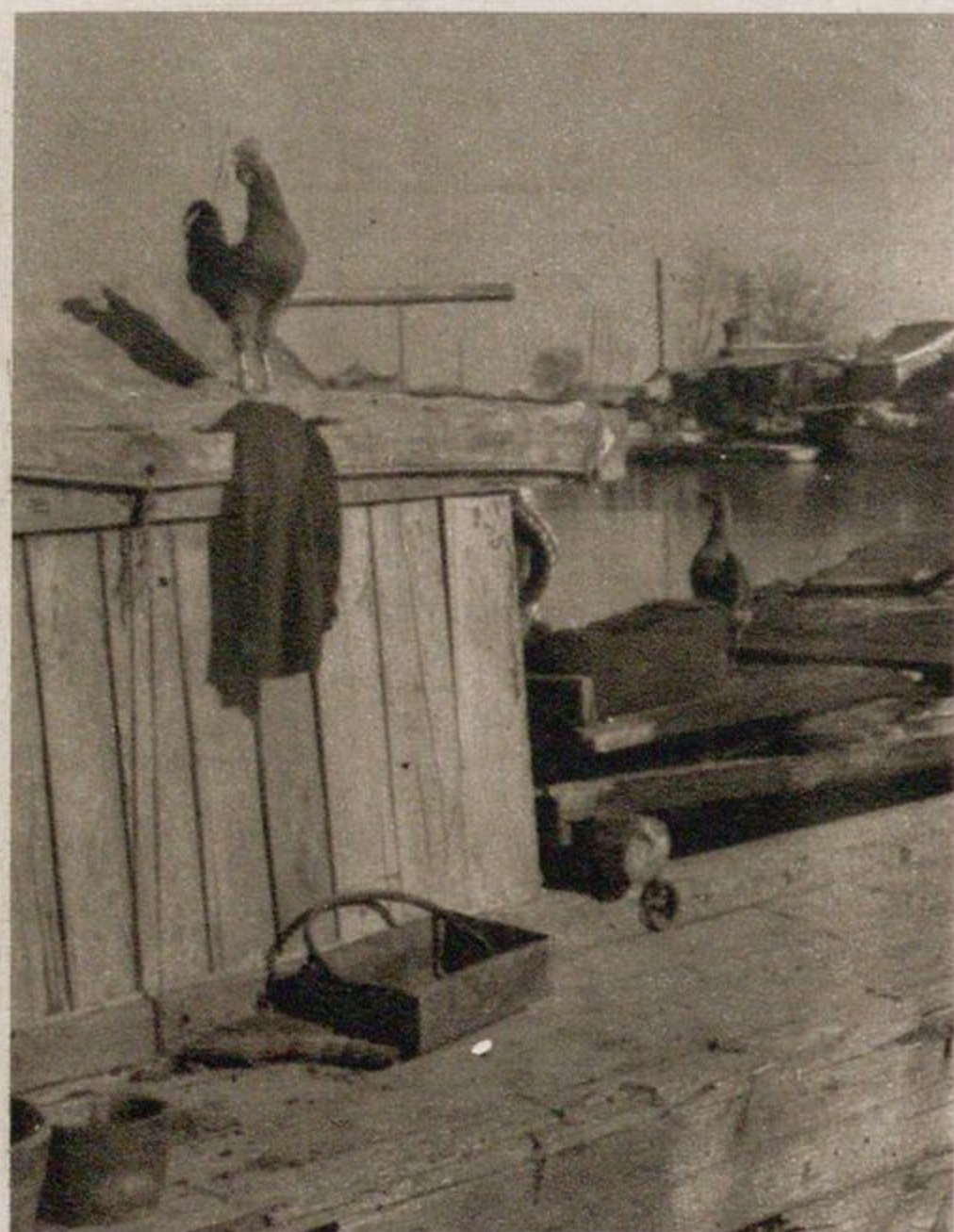
夕餉の仕度

運河

二

舟には鶏も飼つてゐる

ひよこ

将棋

子供たち

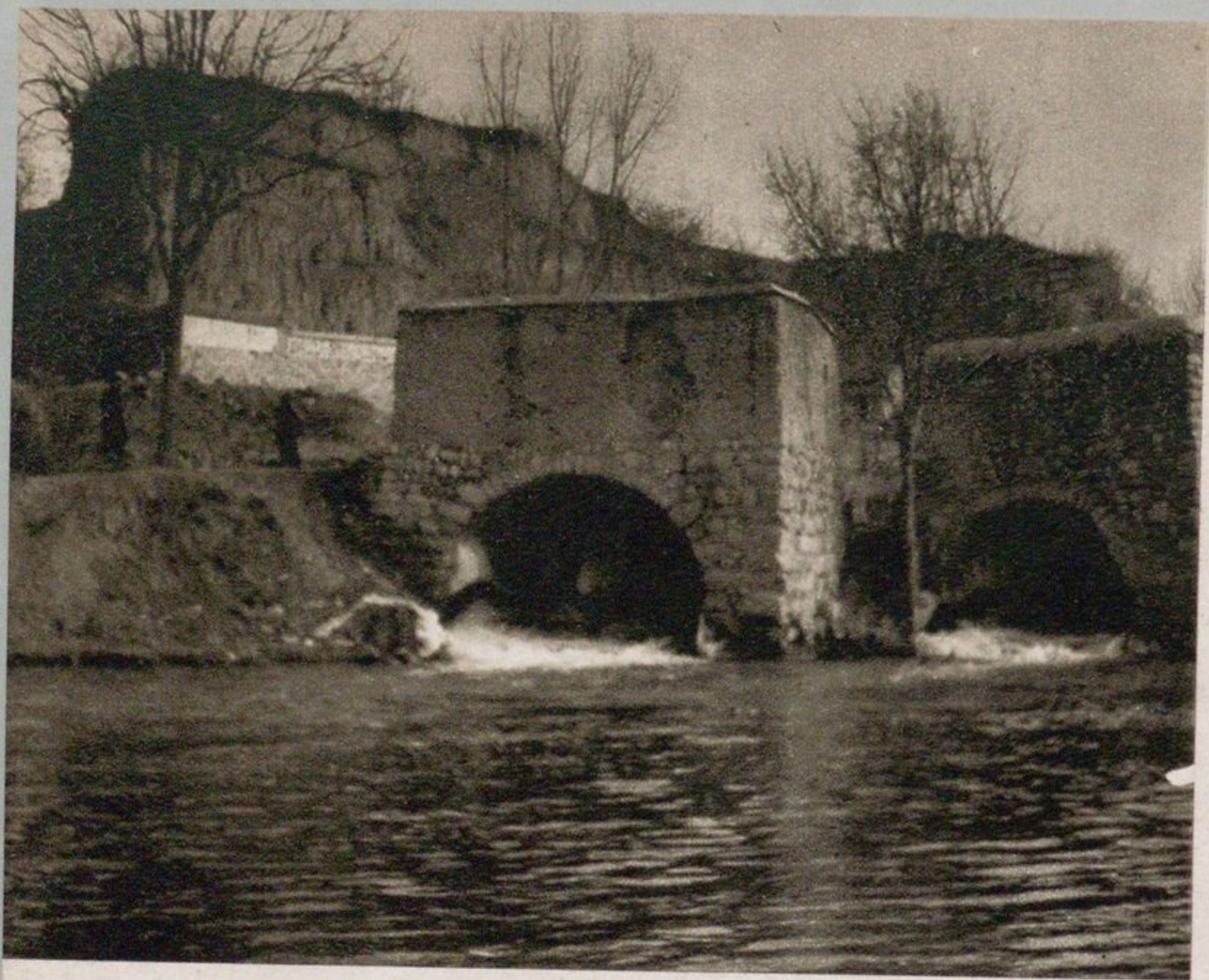
芝居のままごと

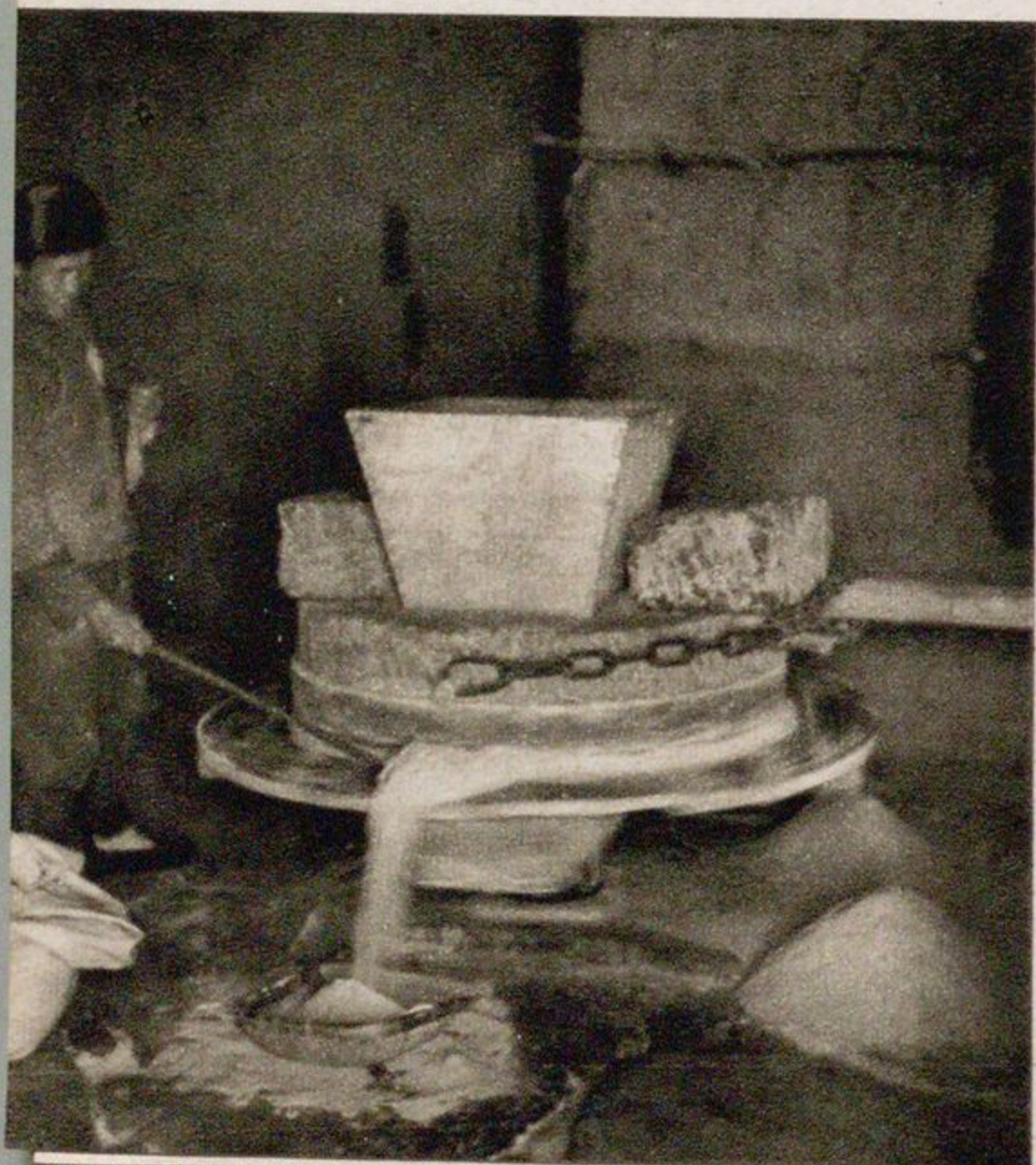
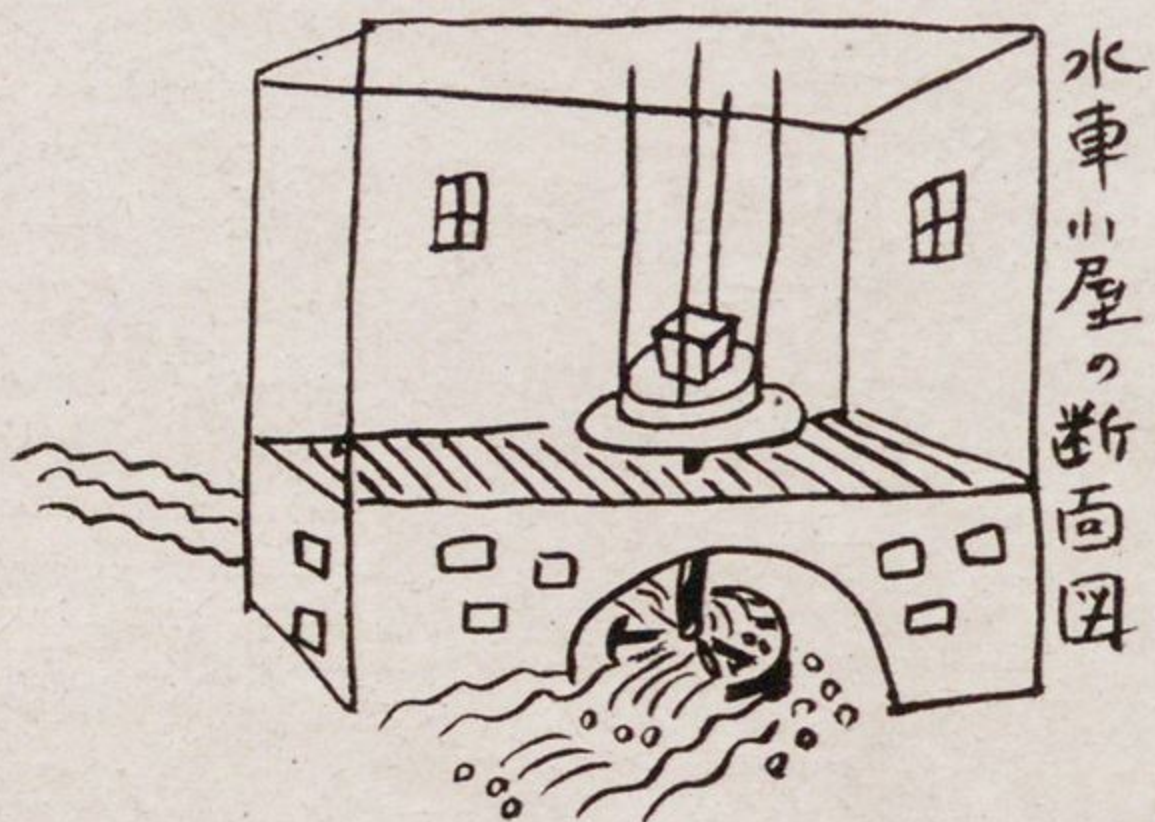
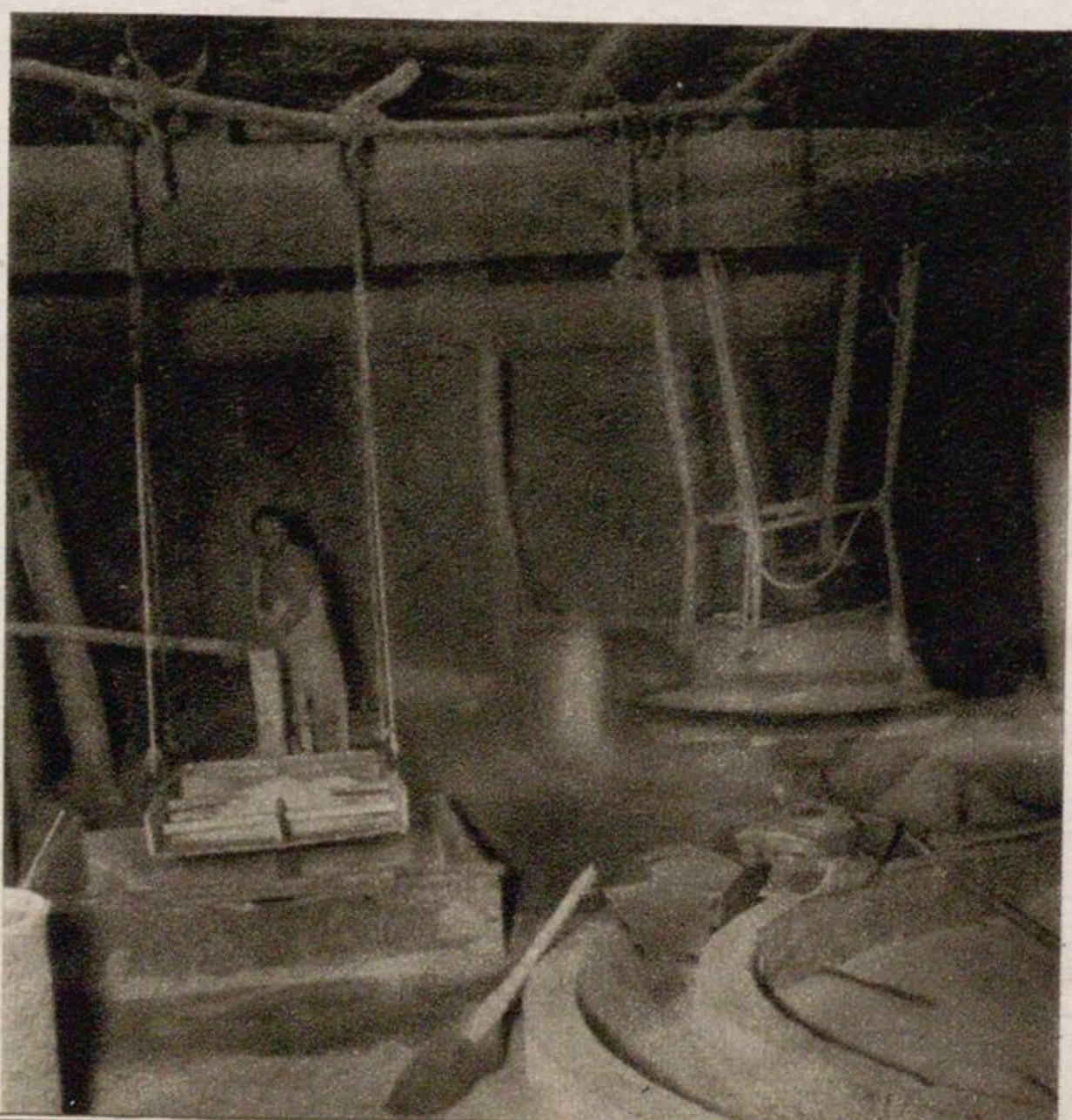
水鐵砲

娘子關附近の水車小屋——車窓より

大行山脈の溪谷を劃つて東西に横切つてゐる石太線の客になると、車窓に清い流れをみる、ところどころに散見する水車小屋は或は斷崖に或は小川に跨つて白い水泡を吐き出してゐる

この水車の様式は日本人の眼には頗る珍らしいものである。圖に示す如く車は横倒し、小屋は一階と二階になつてゐて下で車が廻り二階で作業をする。この様式は隋・唐の頃から北方にあつたものである。何千年來進歩も工夫も施されてゐない、だからとて非能率的でも不合理でもない、否むしろ機械の簡單素朴（鐵を使用せずほとんど木と石である）なのに感心させられるのである。此の水車は、あたり一帶の雜木を集めて粉末にし、線香の原料を作るのが主な仕事である

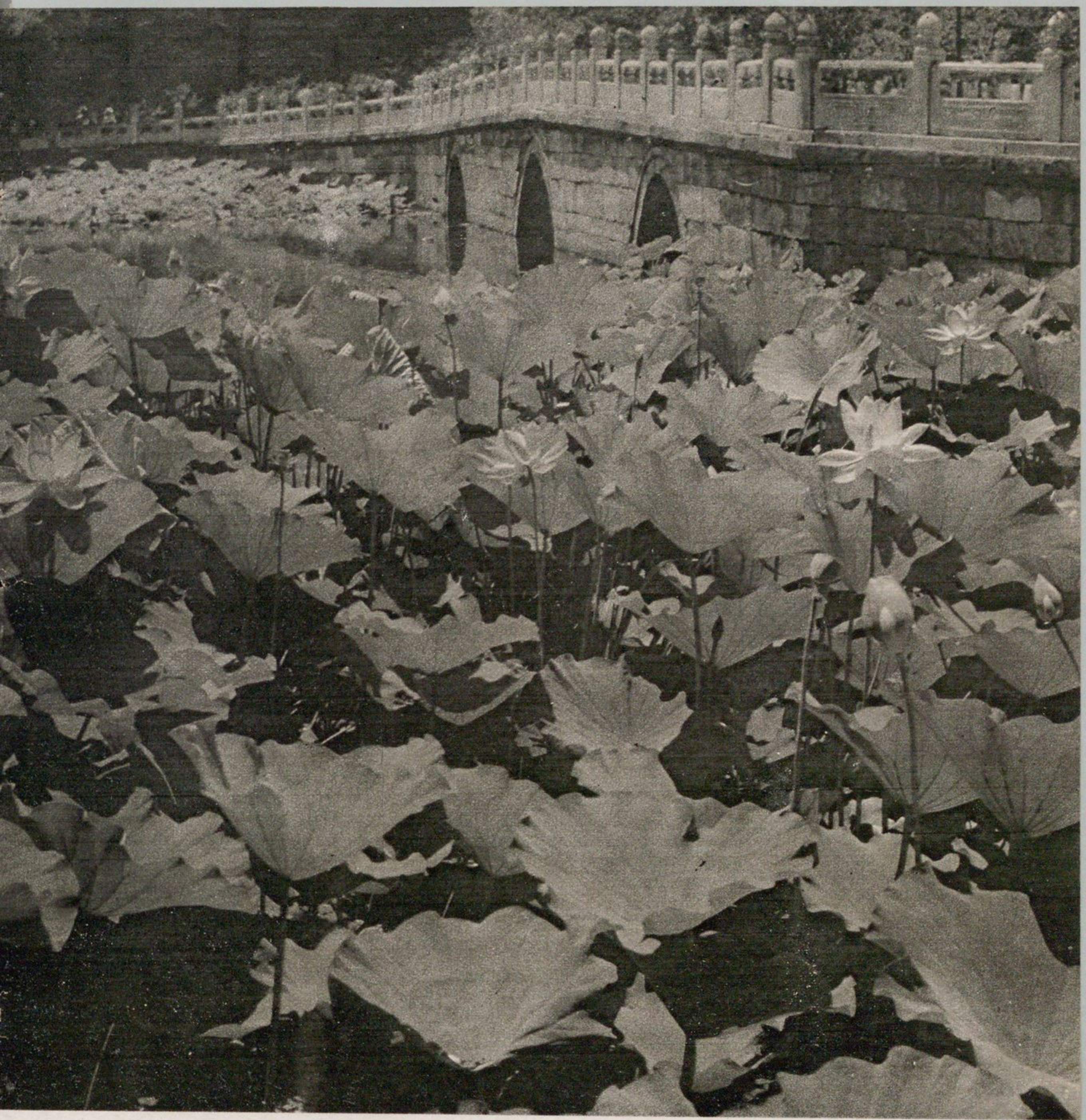
沿線の流れの源は全部湧水である。ある水車など川から水をひくことなしに直接湧出口に車を据ゑてゐるのを見かけた。それほど湧水はごうごうと噴出してゐるのである

水車

水車小屋、アーチの下で水車が廻つてゐる

小屋の内部、上の石臼は横木によつて固定し下の臺が廻つてゐる

小屋の内部、石臼を天井から吊し、下の臺が廻るやうになつてゐる

萬壽山昆明湖を望む

夏の女

夾竹桃のある院子

北海の蓮

季節の花

水慕はしい夏時に北京の湖を飾るものは蓮花の穏波、合間に小姐の舟が行く。『橋の兩岸、紅荷盛んに開く、丹樓碧山水際に聳立す。微雨偶ゝ作れば荷香人を襲ふ。宮殿は烟林雲水の間に在り、頗る仙山縹緲の想ひあり』その昔李蓮客なる人、北海に遊んで蓮の花を眺めていふところ、今に變りはない

蓮の花は抹香臭く日本の俗には喜ばぬけれども、中國では蓮は連に音通じて圖案などにもよく用ひられる花だ

合歡、或は合昏、夜合花とも云ふ。夜の女を思はす妖氣あり、北京の閤にふさはしい花であるがさすがに花の品としては上位に置かぬものらしい。詩文にもあまり見えぬ。但し長安街、中央公園前、東交民巷に見る並木の、花一時に咲出る頃の感觸は、射す陽の烈しさを歎げる。たそがれ時に化粧する女の頰の鮮かさ、この花は命長く咲繼ぐけれども散り際の見苦しい花だ

旅人の胸に忘れ難い匂をこめてしまふ花、玉蘭。どこからとなく街の市場に姿を見せる。實は豐臺の產。昔は花匠が朝まだき露の干ぬまに北京へ北京へと續いたさうである。これは針金にて

合歡

晩香玉——花が早くしぼまないやうに、濡れた布の上に置いて賣つてゐる

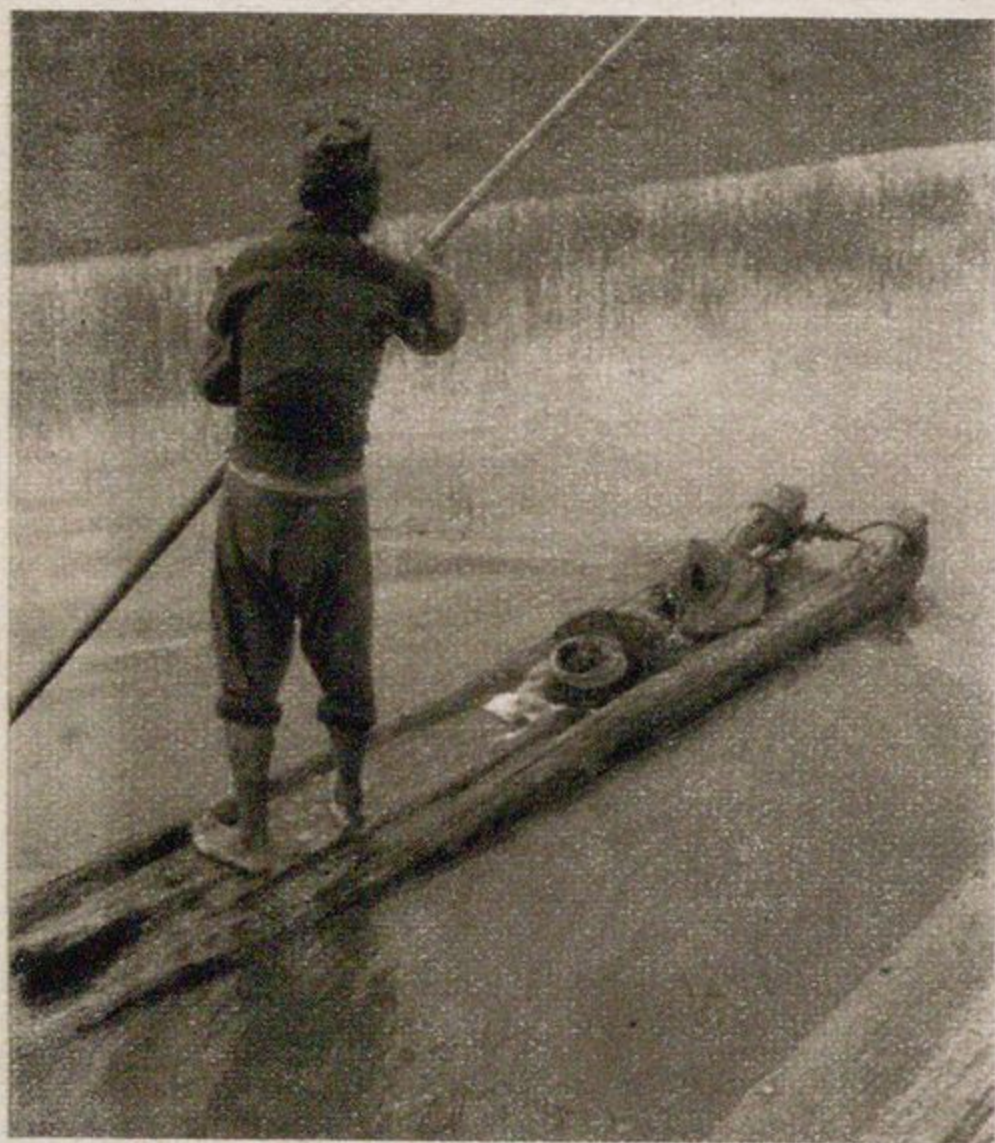
幾つかを綴り合せて賣るのだ。良家の娘、街の遊女等が胸間に飾るもの、香氣清爽にして、甘美、人を魅了する。我等がこの花と誤る花に、晩香玉があるが、これは身につけることはない。但し夜に入つて頓に香ること茉莉花と同樣である

さかなとり

生きるに強い漢民族は乾燥華北の内陸水に於いてもよく生活の糧を求めてゐる。だが漁民は例外なしに貧しくてただ漁商達に搾取される。そして漁具も漁法も父祖傳來のままから改良するだけの餘力に惠まれてゐない。

この黄海の濱に漁る連雲附近の漁夫たちにも、惠まれたものは太陽と海風とだけである。その網は扒拉網といひ、船上より曳く人力底曳網といふべきもの

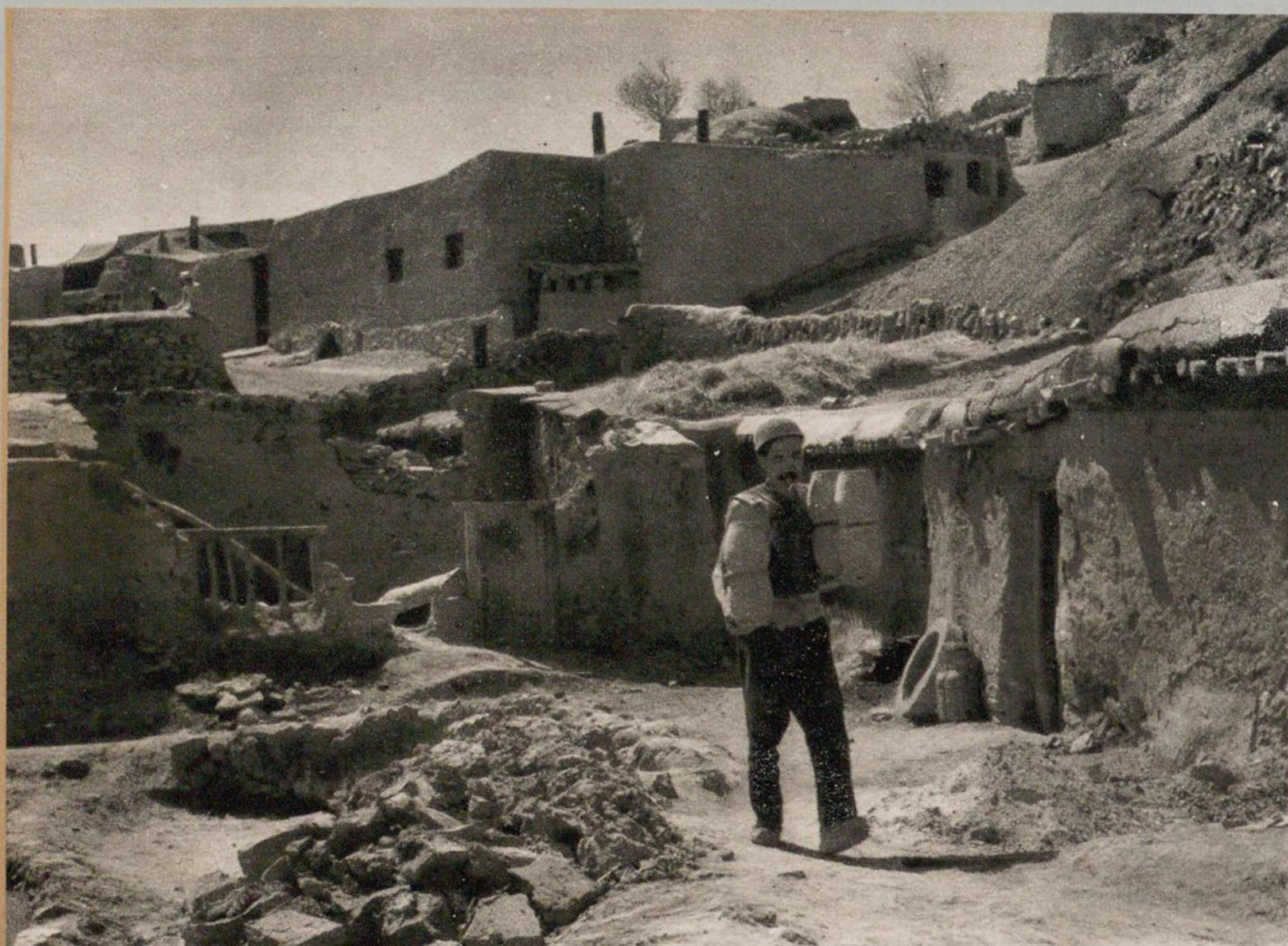
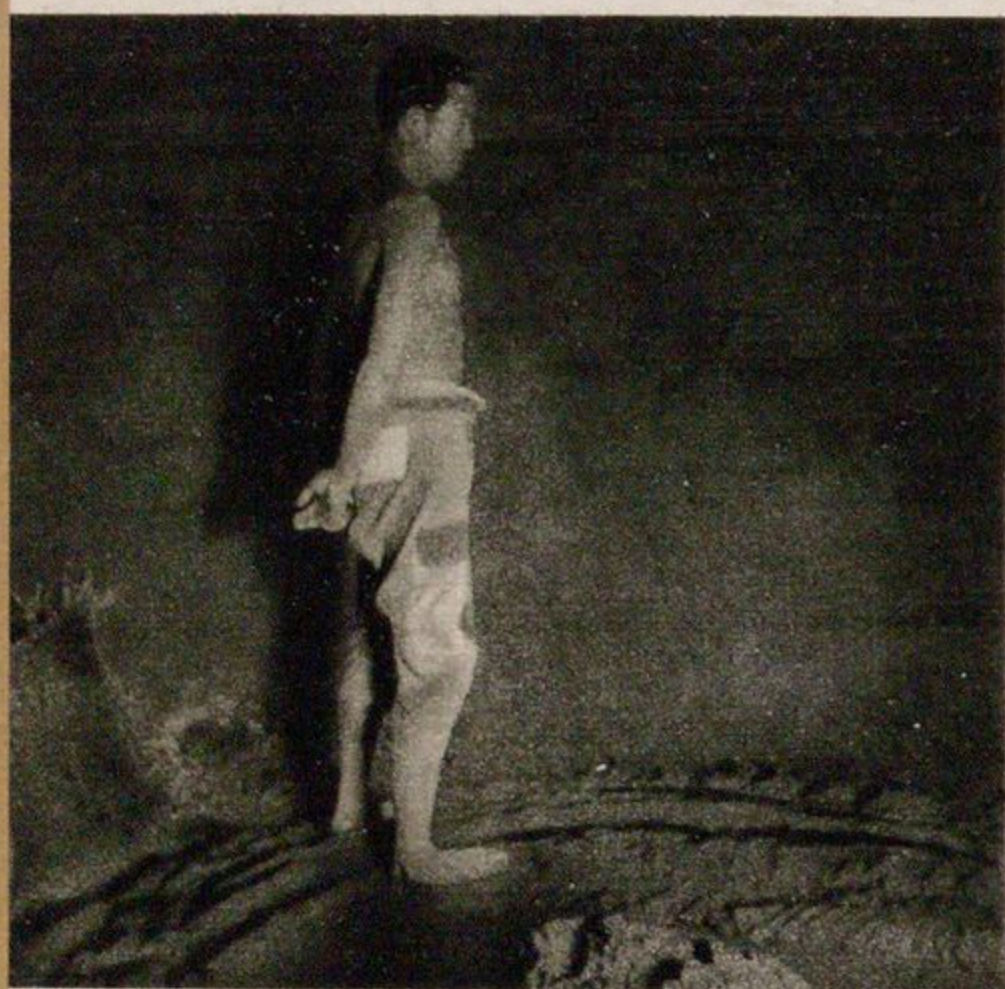
浮草と流木が拾はれて薪にされ、漁獲を換へて得たる少許の米麵が粥にかしがれる。家も畑も押し潰された白河の氾濫水の中でこれより外に生活の方途が見出されようか。そこでは魚踪を逐うて張られる幾つもの簗が、汪漾十里の水上に模様を描く

舊黄河の河あとに今も見られる潴水地——徐州でもかく多數の旋網（シユアンマン）——投網が賑ふ

これは又南支の破れ漁船よりも貧しいだがその原始さに驚かされる漁舟？である。筏の類と見るべきものであるが華北の水郷の大衆はこの程度の舟筏に頼ることが多く、從つて居民に棹の利く者が少くない。圖は山東小清河に見られるもの ⇦

この盥船——河南睢寧縣——に至つては仙味を帶び、監裏無魚缺酒錢てふ詩興を思ひ出させる。だがこの翁案外酒など呑むゆとりがないのかもしれない ⇨

山西の尙希莊窯

平窯

原料土の粉碎作業

窯燒く村

土踏み

轆轤

宋代頃からの窯と云ひ傳へられてゐる
この窯は、北同蒲線侚希莊站から北西
方十二粁程山へ這入り込んだ所にある
陶土も釉藥も匣鉢の耐火粘土も石炭も
全部がこの地の所産であり、年産額僅
か二萬餘圓の小さな陶業地であるが、

三十戸程の全部落民が傳承された技術
をもつて甕、茶碗、皿、酒壺等を造つ
てゐる。製品は何れも幼稚な製作法だ
が、親しみ深い。尙ほ本號讀物頁に詳
細を報告した

製品の一部

京山線沿線地理景觀（一）

小林倍一郎

山海關から北京の北方にかけては、海拔千餘米の、或は屛風の樣な、或は龍蟠虎踞すると云つた樣な山々が錯綜してゐて、燕山といふ總稱で呼ばれてゐる。これを縫ふて走る萬里の長城は熱河高原の南緣を劃しながら、明末清初の頃までは農業支那の北緣を意味した。この中原の北緣は、時に北方民族の勢力に掩はれ、この民族の嵐に對し、幾重にも備へが加へられた。

そこでは民族文化の混淆と切磋が繰返され、慷慨悲歌の氣風は培はれたのである。この特色ある文化地域の意義を歷史は幾度も物語つてゐる。

謂ゆる春秋戰國の燕は、太子丹の强秦に迫るの策を孕み、唐代漁陽の鼙鼓は中原を震駭するに十分であつた。

此の興味ある地域の特異性を、現在の景觀の中に於て地理的に觀察を試みられるといふことは實に面白い。

尤もこの地域を本項では京山線の背後地と云ふ意味に於て、西を永定河の扇狀地と海河の岸に限り、北は長城線東半部から薊縣を經て北京への線で劃されてゐる。

通縣より以北の潮白河上中流は、京古線のために割愛しなければならぬ。南限は古代文化の上から興味多い北洋——渤海に限られる。即ち河北省冀東道の大部と津海道の北部を加へたもので、稍々不規則な三角形を成し、その中には二十程の縣と三つの市がある。

右の領域もまた地理の上から見ると東部と西部とは諸種の條件に相違があつて、兩部に分けて觀察する方が至極便利である。その境界は大體、灤河デルタの西南角から、唐山附近を橫切つて、玉田、三河への線に求められる。

東　部

唐山以東の丘陵地域と混合三角洲

前述の燕山が長城以内に下ると愈々低くなり、且つ分離して、その間に幾つもの沖積河谷が抱かれる。

東から擧げると石門寨、撫寧、盧龍、遷安、豐潤、遵化、薊などの小盆地がそれである。そしてその丘陵群の南緣に近い處を線路が走る。だから中生代の礫岩から成る角山、斑岩の碣石山、安山、古生代石灰岩と斑岩脈からなる橫山などが、北側の車窓に人目を惹きたい樣に、或は巍然として聳え、或は漫然と佇立する。

併し灤縣から東では南側にも溺れ殘つた丘の群れが點在してゐる。中でも秦皇島や金山嘴などの陸繫島が海に面して岬をなし、この陸繫島の陰は、或は開灤炭の埠頭となり、或は海水浴場に利用される砂濱となつてゐる。

北戴河の背後の聯峰山も巨晶花崗岩からなる同樣の殘丘で、その提供した美しい砂と、この斜面に植ゑられたアカシヤや松の林は、渤海の海洋學的條件より來る夏季水溫の上昇——青島はやゝ低溫に過ぎる——と共に、此の保養地のかち得た條件といへる。

また灤縣の巖山などは、溺れ殘つた點では相似た形で孤立してゐるけれ共これ等には可なり斷層作用が加はつてゐる。そしてこの斷層作用は秦皇島の北方に、湯泉鎭の溫泉を寄與してゐる。

右の諸丘陵は、總じて東部や北部ではプレシニアン（古生代初期以前）の變質岩——山海關附近の低位置古侵蝕

內　容

第四卷　八月號

面、秦皇島、金山嘴など――に富み、これに時たま脈岩の迸入作用に伴ふて金、銀、マンガンを胚胎したり、石灰、石英、長石、晶石、螢石なども挾在する。また昌黎附近の斑岩の迸出の與へた地貌狀況と、石門寨附近に挾まれた後期古生代の與へた柳江、長城二炭山は注目すべき景觀である。

これに對し、灤縣以西ではポストシニアンの石灰岩多く、この石灰岩はその間に挾まれる磁土、沙土、石英、綿石、更に北戴河の長石、石英、塘沽のソーダと共に、唐山のセメント、製陶工業、秦皇島のガラス工業に寄與したのである。而も近くは礬土頁岩の開發が行はれたのもこの地區――古治――であつた。更に特に有名なのは、開灤附近の中生代盆地構造の形成に伴ひ、低位置に保藏された炭田である。

此の炭田の英資共働による開發に伴ひ、近代的な機械採炭及び秦皇島港の特色ある運營、或は之に伴ふ煤運河、京奉鐵道の開設は、蓋し當地區の著しい特徴的な景觀形成の動機であつた。即ちこの炭礦に附隨して秦皇島のガラス工業が發生するのみならず、唐山はセメント、金屬工業、製陶、紡績などの諸工業が發生し、延いては此等製品に加ふるに、更に天津方面より仕入れられた雜貨とを捌く行商人の足場となり、漸次冀東商業の中心になつた。

車窓に工場を見、百貨來往の驛舍を見た人は、この間の情況が判るであらうが、北支に最も知れた唐山の燻鷄の驛賣りを檢べれば、尙瞭然たるものを知るであらう。この鷄たるや冀東から熱河にかけて出歩く千餘百の唐山行商人が、雜貨を携へて廻つた賣上げを鷄と卵に代へて歸り來つたものである。

これは過半天津方面へ發送されるが一半は近く長蘆鹽場を控へて鹽の利用の便利なことと、炭礦や對滿、對京津旅客の需要に助けられて、古くは鹵鷄といはれた素朴なものから、漸次手が加へられて燻鷄といふ上等な味に調理されて來たのである。

尙、開灤炭田の外、灤縣方面にも炭層、鐵鑛の埋藏がある。たゞこれ等の炭層は傾斜大なるため、急いで開發されなかつたものに過ぎぬ。

上述丘陵地帶の間には石河、湯河、戴河、洋河、灤河などの河谷が開けてゐて、此等の谷の上流部の松林や、河原の楊柳の類が、鑛山地帶に坑木を提供する。更に注目すべきは、此等諸川の廣い氾濫原や舊河道の荒れた沙質土壤地帶が、栗、桃、李等の果樹や桑、柞樹の栽培に當てられてゐることである。

特に盧龍、遷安方面の甘栗は有名であるが、この河跡荒地を利用した果樹栽培の外に、更に山麓斜面の黃土地帶や、その下に展いた扇狀地や、崖錐にかけて擴がる型式がある。

昌黎附近の桃や葡萄はその最も著しいものである。而してこの果樹栽培地域は、鐵路の北卽ち丘陵ある地區に限られて、鐵路の南に見られないことは面白い。尙、目下昌黎には華北交通會社の農事試驗場が設けられ、科學的な指導に備へられてゐる。

尙、前述の河原の土地利用の一種として、桑の栽培と養蠶はその額は多くないが、確にこの地方の特色ある景觀である。又遷安方面ではこの桑の樹皮より、三里河の清流を利用して毛頭紙高麗紙――遷安紙の製造が行はれ、その枝桿は天津郊外（小王村）に桑條細工の原料として送られる。

右の丘陵地帶を流出した河川は、渤海との間にデルタの建設を續けて居り殊に灤河のそれは最も大きく千三百餘方粁に達する。

灤河自身は古期デルタの中に段丘を切り込んでゐて、只樂亭縣附近に新期の低いデルタを作つてゐるから、灤縣までは可なりの舟運を見、更に上流も熱河省まで特有の小舟で溯れるが、そ

の古期デルタの上や、その外に懸る小河川には、ワヂ（涸河）に近いものがあり、たゞ廣い砂土地帯が這ひ廻るため、可なりの荒蕪地が擴がるけれども丘陵地内と異り、その利用は楊柳の木立に當てられてゐるに過ぎぬ。

假令、石河や蒲河下流に、葦の繁茂が、アンペラや北戴河方面の洋人に喜ばれる夏日笠、或は工業用纖維の供給地ではあり得ても、農業上から見れば此の區域は丘陵地の内も外も穀類の多收穫地帯ではなくて、豆類を始め滿洲など他地域からの供給に頼らねばならなかつた處である。

大體、右に述べた東部は、氣候も華北平原地區と異り、稍〻多濕であつて――殊に山海關附近――且つ、雨季も稍〻早晩があり、多期の寒さも強い。

尤も此を關外一歩を出た滿洲國側と比ぶれば格段の差があつて、その季節に滿洲から入つて來る人は急に寒氣の軟らぎを感じて氣候の上からもはつきり關の内外が劃し得られることに驚くのであるが、逆に夏季に於ても、海と山に近い比較的多濕、低溫なことが、華北からの客を刺戟するであらう。

而してこの特殊の氣候は、土壤の色や質に明らかに反應してゐて、新しい少許の黄土を除けば中性の褐色を帶びたものが多く、中には古い非石灰質赤色土さへあり、概して山東の土壤に酷似して來る。

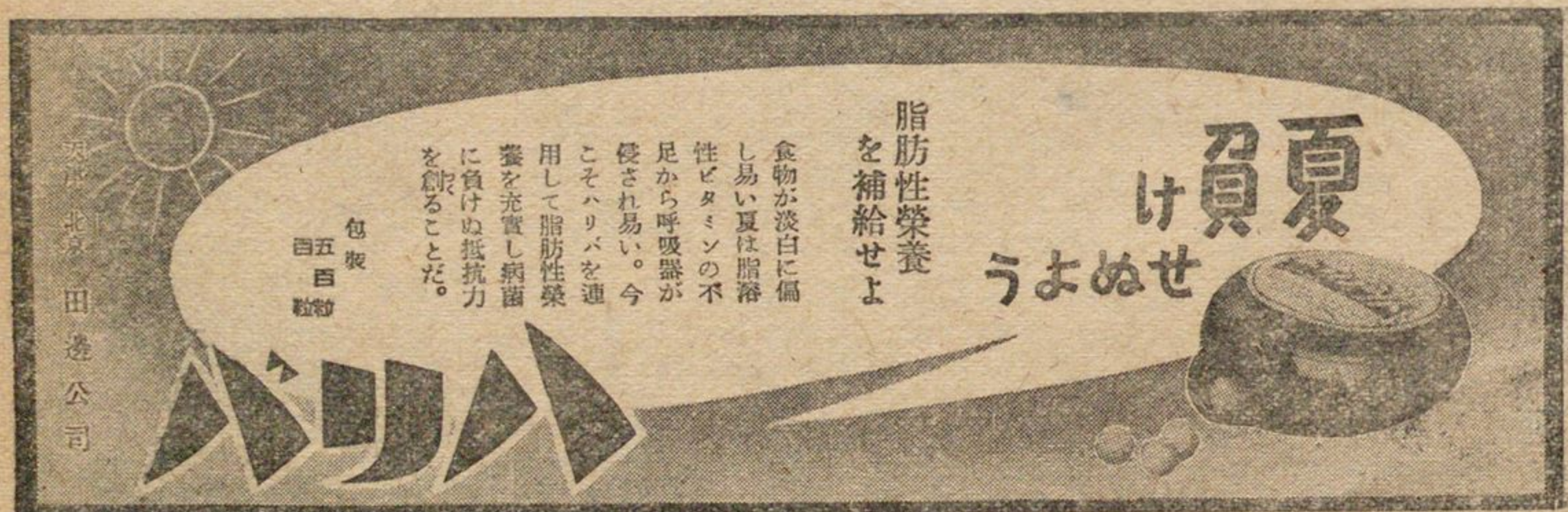
このために此の地區の農民は、少許だに黄土を見出せば、中性土壤の畑に肥料の如く散布して居り、また果樹栽培や桑柞類栽培などに伴ふ、山東酷似の景觀が指摘されたりするのである。

右に述べ來つた如き地理的な事情から見ても、華北平原區と特殊な差異を示す東部地區、少くともその東北角（臨楡縣、撫寧縣あたり）は、太古のことは別として、中古以來の農業文化の意味に於て開拓されること蓋し古からぬものの如く思はれ、本當に開かれたのは明清頃のことでないかと思はれる。

漢唐の東征、五代交爭の史上にも有名であるとは云へ、府縣の移動もあり明清に於ける屯田や、移民を思はせる聚落形が認められる。又そこには特有の平房子型の屋根が移民文化の歴史性を語る樣である。此の見地からするも住民の人種的複雜性が考へられる。

而も古來、此の地をして天下の要衝たらしめたのは、熱河高原の韃靼と東北女眞との交界點であり、山海關の廻廊を控へてゐるためである。

此の形勢は、現代の交通から見ても些かも變つてゐない。

西部

唐山以西の平原

西部は一望只平坦な平原であるが、その大部分の普通畑作地帯と、その間に抱かれた低窪地との景觀には、可なりの相違がある。

前者は北京廊坊間や、唐山附近の如く、比較的に山近い地方で、第三紀から洪積期にかけての、赤色土層や黄土を基盤にして、その上に沖積土を被つたものの樣であるし、地形的にも扇狀地であるため、稍〻高燥の感がある畑地で、雜穀や棉花の生産を見る。そこでこの地區の中間箭桿河に近い寶坻を中心とした地區が、土布の家庭工業で知られて居り、又胥各莊（唐山の西の驛）に近い韓城を中心として、高粱酒の麯（麯子）の製造が行はれる。附近の高粱豐作區に原料を求め、北方の熱河高原にかけての消費地へ車馬交通によつて捌かれたものであつた。とに角この二つの家庭工業は本地區特殊のものであつたが、これも過ぎし熱河作戰後大きな打擊を受けてゐる。（未完）

訂正

北支五月號所載「立ち上がる北支の日本女性」中「消費組合の賣子」とあるは「消費生計所の配給員」の誤りにつき訂正す。

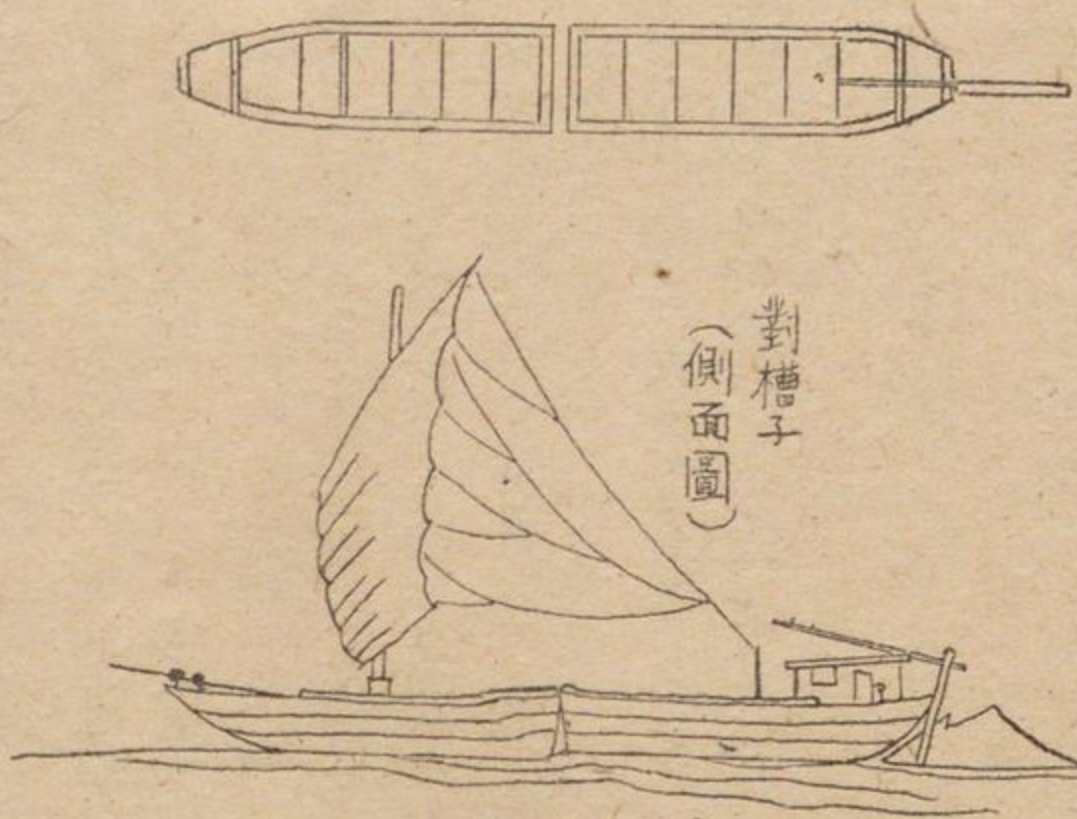
内河の船

大川洪

對槽子

子牙河、南運河をはじめ、北支の内河で最も多く見られる船は對槽子である。恐らく北支全水域に存在する船の七・八割位はこの型で占められてゐるであらうと推定されてゐる。かくも對槽子（或は單に槽子とも云ふ）が普及されてゐるのは、何故であらうか。

一體に、北支河川は、水源乏しく、水量が少く、從つて、水深に惠まれず、また彎曲、頗る多く、しかも河幅が極めて狹いといふ特質を持つてゐる。

ところで、この對槽子はかうした條件の惡い水路を航行するのに好適せしむるべく設計されたもので、他の船型――一身船に比し、構造も簡單であり、船底が平底となつてゐるので、吃水が非常に淺い。そして何よりも便利なことには前槽（前艙とも云ふ）と、後槽（後艙とも稱す）に分割接續されてゐるので、彎曲箇所の通過や河幅狹き箇所で「廻れ右」をする時に前後の船體を分離して、無事に航行し得られることである。

對槽子（平面圖）

對槽子（側面圖）

又、前槽後槽のどちらかが坐礁、或は衝突、火災、浸水等の事故に依り、被害を蒙つた時にも之を即座に分離して損失の波及を防止し得ること、あたかも汽船に於ける支水隔壁の如くである。

このほか、兩舷より水面までの距離が近いため、操作輕便で勞力を省き得、船首が圓平型になつてゐるので、舊式船に比し速力が出る等の特色を有してゐる。

何と云つても、北支内河民船の王座を占めるものは、我が對槽子である。而して一〇噸――二〇噸級を小槽子、二〇噸――七〇噸級を中槽子、七〇噸――一五〇噸級を大槽子と云ひ、これが造船所を船廠と稱し、其の建造費は事變前、噸當り三十圓位であつたが、現在は暴騰して噸當り三百圓位となつてゐる。

糧船

元朝時代に於ける南方よりの運道はこれを文獻に徵するに蘇州・劉家港・海門・黃連沙を經て海路天津に直行したものの如く、使用船舶は遮洋船であつた。

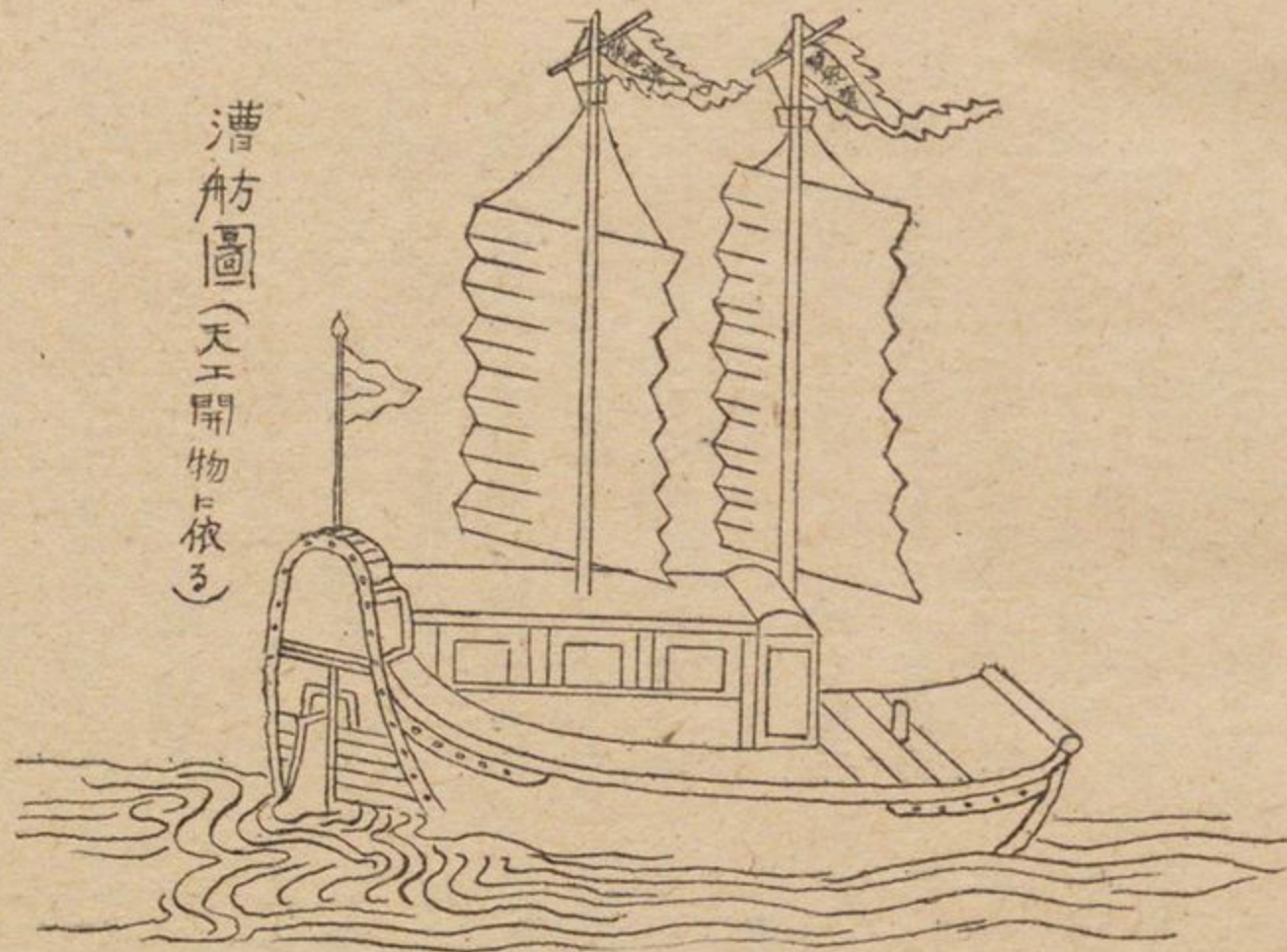
降つて明の永樂年間に至り、遮洋船による輸送は、風浪の危險尠なからざるに鑑み、漕運に改めることとし、平

江伯の陳某なる者が、初めて平底淺船の糧船を創り出し、實際の用に供された。

爾來、江浙兩省を始め、中南支各省の貢米は、漕船卽ち糧船により、運河（糧運河、漕運河とも云ふ）を上つて京師に輸漕され、淸末一八七二年（明治五年卽ち同治十一年）に、招商局が創立され、貢米輸送が汽船に依る海路經由に變更されるまで、運河の漕運は盛大に續けられた。

堂々幾十隻の糧船が、舳艫相ふくみ運河を壓して北上南下した、そのかみは思ふだに壯觀を極めたことと想像されるが、更にその先頭には美しい桅樓を船首に備へた華麗なる漕舫が先行し一層の威を添へたのであつた。だが、星移り年變れる今となつては、歷史の神祕に彩られた運河のみ變らぬ姿態を橫へて沈默を守り、糧船、漕舫の夢を追ふべくもない。玆にはただ記錄に殘る當時の繪姿を揭げて、往時の河筋の殷盛の跡を偲ぶよすがとするのみである。

跟船的

北支の內河を航行する民船は、上下航共風のある時は篷（帆）を用ひるが無風、逆風の時や、水の淺い時など一般に綫繩（曳綱）で拉縴（引張る）するのが普通である。外には、時に應じ櫓・櫂・撑篙（水棹）或は紋關（カグラサン）等を併せ用ひる。

前清時代、運鹽船や運糧船は、殊に多くの縴夫（曳行苦力）を驅使して大規模な輸送に從つた。

現在でも各航路の民船に多くの縴夫が乘り込んで拉縴してゐるが、爰に述べんとするのは、事業の縴夫のことではなく、臨時に曳行に從ふ勞働者、卽ち跟船的のことである。

漕舫圖（天工開物に依る）

農村から職を求めて都會へ上る貧窮なる離村者は、跟船（無料で臨時に乘船）して、晝は縴夫と共に拉縴し、夜は船內に眠り、船の人々と同じ生活を送る。かくて目的地へ到着したならば管船的（船の親方）から若干の乾糧と何がしかの金を贈られて辭去するのである。

これを民船側から見れば、雇工（勞働者卽ち縴夫雇傭）費の節減となり、跟船的自身にとつては、無錢で旅行出來て、おまけに、お土産まで與へられて、目指す土地に行くことが出來るのである。双方とも利益となるところに妙味が存する譯で、吾々は、中國の從來のかうした妙味を見逃してはならない。

尙、問題は改まるが、淸末の頃、天津に民船の縴夫を一手に供給する業者が現はれて、これを縴行と謂ひ、これは大紅橋（天津の一地名）に於ける水地方（卽ち地保）の操縱する所であつたが、其の後四十年を經た今日では殆んど有名無實と化し去つて了つたことを序でに附言して置かう。（筆者は華北交通水運局員）

山西の一民窯

（グラフ頁參照）

加藤留助

この窯の所在地は、山西省懷仁縣と左雲縣との縣境、張毛圪塔（チャンマオコタ）と謂ふ處である。今假りに之を倘希莊窯と呼ぶことにしよう。

北同蒲線倘希莊站から北西方約十二粁、吳家窰の南方一粁の地點である。附近の治安惡く、乘物の便も無いので華北交通警務段の人達の協力を得てトラックで往復した。

廣い左雲縣街道が站から眞直ぐ北に向つて延びて居り、やがて大峪口と云ふ部落を右に見る頃から、いよ〳〵山に取り付いて、曲りくねつた斷崖の道を更に二粁ほど行くと黑煙に覆はれた部落がある。そこが謂ゆる倘希莊窯である。好天の日には恐らく站からでも窯燒く煙が望見出來ることであらう。

部落は僅か三十戸程の小部落ではあるが、陶土の山を背景にして全部落民が孜々として原始的な手法で土を練り轆轤を廻し窯を燒いてゐる。

開窯の年代は詳かにし得ないが、古老に傳へ聞くところでは二十數代前とも云ひ、もつと前だとも云ふ。ザツト七百年、先づ宋代あたりと思はれるが或はもつと遡るのかも知れない。

街道と川を挾んで兩側に山裾から段段上へ、家も工場も窯もゴチヤ〳〵と建てられ、到るところ道端には天目釉の陶片が散らかつてゐる。

窯は全部で十七基あり、何れも徑三米、高さ五米程の平窯である。規模極めて小さく、河南磁縣彭城鎭や、山東博山等には遠く及ばない。交通不便、僻陬の地であつた故でもあらう。

同蒲線開通以前にあつては、製品の大部分は大同、豐鎭等附近の縣城へ馬車で賣り捌いたものらしいが、今日では遠く包頭、厚和、張家口あたりまで倘希莊站から積出され、商取引は倘希莊站で行はれてゐる。年産額僅か二萬餘圓の微々たる家內工業に過ぎないが治安の回復につれ、その地一帶の豐富な陶土と、北方一粁程の吳家窰から手掘で持ち出す良質有煙炭を擁して立地條件は滿點に近い。

山また山に圍まれた、文化とは凡そ緣遠い場所に置き忘れられたやうな窯燒く村に、近代的なものは何一つ求められないが、然し斯樣な場所であつたからこそ轆轤にも型物にも宋代頃の技術を多分に傳へ來たとも云ひ得るのであらう。幼稚さの點から云へば日本內地の丁度五、六十年前頃の狀態だと思はれるが、それでゐて無理もなく理窟通り手順良く行はれてゐるのは、全く傳統の然らしむるところであらうと思ふ。

素地原料は、裏山にある鼠色の礬土で、これを乾して石造り徑約二米、輪形に作られた幅約七〇粍の溝の中へ投げ入れ、水を加へて二頭の驢馬が輪轉式に粉碎する、といふより攪拌する、全く原始的な方法である。

出來上つたこの坭は、地上の溜地に流出沈澱させ、適當な硬さになると工場の中へ持ち込み、練り場に盛り上げて身體中を土で汚した十二、三の裸の小僧が萬遍なく足で蹈み交ぜる。

轆轤に乘せる前には、もう一度手で練り、使ひ易いやうに丸めるのだが、その仕方が日本內地と全く同じであるのは面白い。

轆轤は、徑八〇粍、厚さ二五粍程の石製のもので、これを七〇粍位の棒切れで兩手を使つて巧みに廻すのだが、左廻りでは馴れない吾々日本人には一寸扱ひ兼ねる。

小僧が土を練つては轆轤師の橫に擱く、轆轤師はその土を取つて轆轤の中央に叩き付け、大きく轆轤を廻し、土を伸しあげる。更に廻して茶碗を造り糸で切る。見てゐると山西省の山奧でなく、日本內地の工場にでも居るやうな錯覺を起す。

連綿と傳へられ、祖父から父へ、父から子へと、宋代の味と匂ひをその儘傳世して巧みなものである。たゞをかしな事に轆轤に幾年も年期を入れたと思はれるこの茶碗造りの達人にも、茶碗以外のものは造れないし、袋物造りの巧者には、それ以外のものはあまり上手ではないらしい。

恐らく轆轤を手掛け初めた十七八の頃から死ぬまで、その生涯を茶碗造りは茶碗ばかり專門に造り續け、他のものは造つた事がないのか、造る必要がないのかに違ひない。この茶碗を造る職人に簡單な灰皿を造れと賴んだが、一寸やつてみて出來ないと云ふし、又

造つたものは茶碗程上作ではない。畫をかいて懇切丁寧に説明したが、テンデ思ふ樣に手が動かない。遂に袋物造り師のところへ案内されたやうな仕末である。徹底した分業であるらしい。作ゆきは大まかだが、微塵も無駄がない、悠々と落付き拂つて造つてゐるが茶碗は一日に四百個くらゐ造り、且つ仕上げると云ふ。

造りたての品物は、直ぐ工場の中に調らへたオンドル式の乾燥場の土の上に直接に置き並べて乾し、程良く乾くと一挺の大きな「マガリ」で、糸底と腰の部分をホンの一寸削る。も少し糸底をと思つたとたんにはもう濟んでゐる。ハラ〱する程亂暴な仕上げだが何の術もないこの仕上げ方に、却つて味があり、日本人にはピツタリ來るものがある。

何分にも轆轤の上りが立派なので、形はこれで申分がない。寸法も測らず手加減一つで造るのだから、多少の不揃ひは致し方もないが、その一つ一つを手に取つてみると早速夏茶碗にも使へさうである。

現地產の釉藥原料は、天目釉一種類しか無い。これは硅長石を主成とする黄土色の微細な粉末と思はれるが、これを水に入れて攪拌するだけで他には何の工作もしない。卽ち少量の酸化鐵、銅が混入した天然自然の天目釉であるが、かつて建盞天目は建州の黒砂を以てすると云ひ、外には何も混合しないと聞くところからみると、山から採つた原料そのものが天然自然の色釉でも別に不思議な事ではないらしい。相當部厚に釉を施すが、ナダレも無く燒上り極めて優美、落付いた發色であり、これだけでは時代を識別する事は一寸困難であらう。

燒けの素直でないものに柿、蕎麥の窯變が出るが、何れもなか〱美麗なものである。乳白色掛けの釉藥もあるにはあるが土產原料ではない。遠く京山線の唐山から取り寄せたもので、化粧掛けをして使つてゐる。

此處からの歸途、相當量の長石らしい石を見たが、果してこれが長石だとすれば白色釉も立派に出來る譯だ。

この他二度燒三彩釉手のものも造つて居り、一寸味のあるものだが時間の關係上見られなかつたのはかへすがへすも殘念であつた。

此處での厚手の匣鉢は、土產鼠色耐火粘土に黄砂を加へて造る。製品の種類が一定して居り重ね燒の日用雜器の匣鉢にはこの高さ七〇糎、徑三〇糎程のものばかりで用を辨ずるのか他に異形のものを見受けない。鐵分尠なく耐火煉瓦にも使へさうな粘土で、以前見た均窯の鐵分の多い匣鉢とは比較にはならない。

重ね燒の重いものは、品物を匣鉢の中へ入れないで、積み重ねた上へ匣鉢をカブせて積み上げる。匣鉢の底にメズナの付着したもののあるところを見ると、輕いもの、扱ひ易いものは匣鉢の中へ入れるのであらう。製品は全部匣鉢で處理し、棚などは作らない。

窯詰めは二日位、戸口に焚口を造つてこれでいよ〱火を入れ、四日乃至五日位で燒き上げ、後二日程さまして窯出しをするわけである。斯うして出來上つた本燒物の中、天目釉には茶碗、小甕、小皿、酒壺等、白化粧掛けのものには茶碗、小皿等、又三彩釉手のものには蠟燭立等がある。

これと云つた作意もなく、中國人の用途にセツセと造られたこれ等の物の中には生活樣式を異にする吾々日本人にも早速使へさうなものがある。例へば甕は花器に、蠟燭立はブツクエンドに、茶碗はそのまゝ茶碗に、或は向附にといふやうに利用する等、一寸素朴な感じで面白いと思ふ。然し民藝品として推薦するにはまだ〱專門家の良き指導に俟たなければならない點が多い。

一體、華北には、石炭の在る處必ず陶土ありといふ好條件に惠まれて、彭城鎭、博山、唐山、太原、陽泉及びその近傍、大谷、潞安、井陘近傍等、この他まだ有名無名の多くの窯が存在してゐるが、これ等の大部分は家內工業の域を出てはゐず、從つて研究さるべき問題が多い。

往々にして等閑視され易い一窯業の問題ではあるが、華北に於けるこれ等最適の條件を考慮に置いた時、現地開發建設資材としての陶磁器機具類、一般用生活必需品、並に工藝品等の生產擴充が活潑に實現されなければならないと切に思ふのである。これには治安民生の工作と相俟つて是非權威ある日本の專門家の指導の下に工場の設備、窯、素地、釉等も大いに改良され良質安價な製品の生產が華北の需要に應じ得るやう、急速に計畫されなければならない。

この尙希莊窯についても單に宋代頃より存續する一民窯として視るだけでなく、治安民生工作と合せ考へ、日本人の積極的指導が働きかけられなければならないと思つてゐる。

（筆者は華北交通資業局員）

北支農民の鬪ひ

南　太　郎

　眼も開けられないくらゐの黃塵である。夜があけて大分經つた頃だらうと思ふのに空は宵闇のやうな暗さで、東の中天に一點黃色く煙つてゐるのは日輪でもあらうか？　黃塵の切れ間切れ間に見える大地は恐ろしいくらゐの泥砂地で、僅に黍とも葦とも見える葉の細い草が力弱く生えてゐるのみで、家もなく、畑も無く、樹木さへ見えない。

　地の底から漏れるやうな悽愴たる風聲と共に又一としきり黃塵が渦を卷いて、闇夜のやうになつた視界がだんだん明るくなつたかと思ふと、黃塵の幕の中に逞ましい男女の群が、顏も衣物も黃色に染めて、蠢いてゐるのが見えた。

　働いてゐるのだ。畚を以つて土を運び、それを積上げて土堤をつくつてゐるのだ。黃色い地肌のままの堤防が既に見渡す限りの荒野に逞ましい一線を描いてゐる。

　土を掘つて畚に入れ、それを運んで、又、空になつた畚を曳きずつて返つて來る。

　汗が出て、汗に黃塵が附着して、その黃塵を又、新しい汗が洗ひ流してゐる。

　この單調な、しかも苦しい勞働を繰返してゐる勞働者の群の一見無表情の顏の中で時々振返つて堤を見上げる彼等の眼は不思議にも困苦を克服する希望に輝いてゐるではないか。それもその筈だ。

　去年の夏も一昨年の夏も、五年前にも、七年前にも、孜々營々と耕作した畑地が、一瞬の洪水に根こそぎ押流されて、多くは木の根を、夏は草の芽を喰ひながら堪へ難い飢を忍んで、ぎりぎり一ぱいの生死の境に立つてゐる彼等に最後の生の希望を與へる堤防を築いてゐるのである。

　彼等の祖先が山西の盆地を降つて河南の平野に出て來た時から、洪水といふ怖るべき強敵と、民族の盛衰をかけての鬪爭が始まつたのであつた。彼等の祖父も、父も、そして今又彼等も、この苦しい鬪ひを鬪はねばならなかつた。

　初めのうちは一人一人が、又は一家一家が單獨に洪水防禦にあたつたが、こんな小さな力で堰き止められる敵ではなかつた。

　來る年も來る年も、半歳勞苦の農作を洪水に奪はれて、絕えざる飢餓の中に、民族の生存さへ危ぶまれる狀態であつた。

　恰度この時、民族の運命を盛返す英雄が現れた。その人を彼等は大禹といふ敬稱で呼んだ。

　民族を率ゐて洪水との鬪爭に敢然起つた禹は、集積され狂奔する水力の前に、個々に分散した人間の力の如何に微弱であるかを知つて、これを結集して、一つの逞ましい力に導く決心をした。

　禹の取上げた第一の仕事は、彼の民族居住の全域を視察して、厖大、緻密な治水計畫を樹てることであり、第二の仕事は、この計畫の實現のために、民族の持つあらゆる力を結集することであつた。

　彼は人間の持ち得る最高の知能と熱情を持ち、人間の堪へ得る最强の困難に耐へ、部落から部落へ、民衆を治水運動に動員して廻つた。民衆は彼の熱に動かされ、彼の知能に信賴して、防水への計畫的勞働に應じた。部落から部落へ禹の步いた道筋には、見事な堤防が續いた。そこには、既に個々に分散された微弱な力ではなく、集結された强大な勞働力が生まれ、民衆は、希望と自信を持つて、洪水との鬪ひに臨んでゐた。

　苦しい築堤工事に奉仕する勞働群の眼はかうして生氣に輝き初めたのである。

×　×　×

　私は先日治安强化運動中の京漢線を南下する車窓から惠民濠の築造に熱汗を流す農民の美しい裸像を見た。

　恰度その日は黃塵の降る日で、麥の穗を打遙がせつつ黃色い風が眞正面に作業場に吹きつけてゐたし、汗にぬれた農民の群は、默々として土を掘り、土を運び、土の防壁を築いてゐた。

　私は、赤い鬼「共匪」と鬪ふ民衆の勤勞から連想して、治水とたたかつたといふ彼等の祖先、禹の時代の農民の勤勞を、こんな風に幻想したのであつた。

×　×　×

幻想の場面が一轉して隋の煬帝の頃の大運河工事場に移つた。

打續く旱天に天は紺碧に輝き、地は眞白に乾いてゐる。所は曾遊の地滄縣の近郊でもあらうか、見渡す限りは名ばかりの麥畑で、か弱い莖を伸ばしたままで枯れ果てんばかりの哀れな姿をさらしてゐる。飲用水に事缺くこの頃の水飢饉では灌漑の水など思ひも及ばないであらう。「水が欲しい、水が欲しい！」のうめきが大地の底から洩れ出て來さうな光景である。

この旱天の眞晝間に大運河掘鑿の工事が進められ、驚くべき多數の民衆がこの仕事に奉仕してゐる。眞白に灼けた大地を一直線に掘り割つて水路をつくる鶴嘴の一隊が汗の素肌を陽に晒してゐるし、その土を運ぶ畚をもつた一隊と鏍を挽いた一隊が地底から這ひ上つて濤の兩側にその土を積み上げては又、空の畚を提げて、濤の下に降りて行く。遠くから眺めると、恰も蟻の勞作そのままの作業隊の働き振りであるが、この中には、その昔罪人流謫の地と云はれた鹽山方面からも多勢の農民が應援に來てゐるといふ。河から河を縫つて延々幾百里、揚子江から通州を結ぶ水路掘開といふ支那一代の大偉業は、皇帝にとつては南方から帝都に運ぶ糧秣輸送路の創設を目的としたものではあつたが、水路兩側の農民にとつては命の綱とも云ふべき灌漑用水を與へる惠の水路建設であり、更に運河以東鹽山縣方面の農民にとつては毎夏の河水氾濫を堰き止める究竟な放水路建設でもある。

大地を灼く太陽の下にあつての彼等の勞働は恐らく苛酷なまでに困苦に充ち滿ちたものであつたらうが、彼等は旱魃に對する防禦の戰として困苦の彼方に光明を望みつつ働き、汗にまみれ、土に穢れた彼等の裸形の中にあつてもその瞳だけは希望に輝いてゐたことであらう。

×　×　×

第一の幻想から第二の幻想への移行は頭の片隅にふと浮び上つた「アジア的生產樣式」の言葉によつて誘導せられたものである。

支那問題辭典の第一頁

「アジア的生產樣式」

の冒頭に

古來東亞に於ては水が少過ぎたり多過ぎたりすることが農業にとつての大問題であり從つてこゝでは治水の遂行、水利の疏通が農業生產の成敗に特別重要な關係をもつといふことは顯著な事實である。そも〳〵生產とは人間集團の、自然に對する働かけであるとすれば、東亞農業に於ては水といふ自然力の馴致調整が特別大きな意義をもつのである、古來東亞農業にとつての水の過少といふことは何よりも東亞諸國の歷史に於ける旱魃、水災の記錄がこれを物語つてゐる

とある。禹代の歷史は先づ水災を治める勞働の顯著な事例を綴り、煬帝代の運河工事の勞働は、逆に水運、灌漑用として如何に水を生かすかの好例である。

先頃「ムツソリニア」といふ映畫を見たが、地中海に浮ぶ荒涼たる島の開拓にあたつて、第一期工事として、此の島を荒蕪の原たらしめてゐる最大の癘、洪水をふせぐために排水溝を完成し、第二期工事として、一度、征服した水を再び灌漑に利用するために毛細管水路を構築して、初めて農業移民を送り、見違へるばかりの沃野をつくり上げた十數年間の開墾の經過を記錄してゐるが、流石に悠久無限の支那だけあつて之と同じ經過を三千年の歷史を以て記錄してゐるのである。

×　×　×

この二つの幻想と現實との間に發展の跡を認めることが出來る。黄河の治水工事も、大運河の掘開工事も共に自然を對象とする鬪ひであるが、現實の惠民濠の築造工事は純粹に社會の秩序に對する鬪ひである。自然の暴威を征服し、人が住み、部落が出來、社會生活が始まるとその社會を脅かす敵に對する共同防衞の手段が講ぜられるのであるが、華北の民衆は、部落から部落へ暴虐と欺瞞の暴威を逞しくする共匪から社會の安寧を維持するために、彼等は、彼等の祖父が採つた方法を眞似て、集團勞働を以つて起上つたのである。

中國民衆が祖父より傳承した集團勞働は、その勞働動員の組織に非科學的な弱點はあるが、共同の要求に應じて益〻發展して行くことは想像に難くない。

日本でも蒙疆地區でも既に實施され滿洲國でも又近く實現するといふ勤勞報國組織とその目的とする生產擴充のための勞力の結集。この大東亞共榮圈的勤勞傾向の中に華北の集團勞働の社會的要請とその組織型態を視知することが出來る。（筆者は華北勞工協會勤務）

北京人の主食物

黄子明

二食と三食

商家や工場や、或は大工、左官、さては俥やさんなど、一般筋肉勞働者たちは概ね二食を習はしとし、午前十時頃が朝餉、午后の五時頃に夕餉、謂ゆる晝飯なるものは用ひない。

此の他の人達は、概して三食家である。呂氏春秋などから察すると、戰國時代には三餐、即ち三食を以て一般の常習としてゐたものらしい。

尤も、商家などでは、店員いづれも朝はやく起き、店内の拭き掃除から商品の整理など、可なりあはたゞしい仕事があり、その上、商ひによつては朝はやくから顧客も來ようし、なか〱朝餉などに構つて居るひまに乏しく、又、食事を二度に減らすことは、何かにつけて經濟で、いろ〱の煩雜が省ける。と云つたやうなことから自然に二食の習はしになつたものであらう。

二食の方はまたの機會にゆづり、こゝには北京の三食家たちが、三度の食事にどんな主食物を用ひるかに就てお話を申し上げることにする。

點心の朝餉

日本では、朝餉はおしなべて先づ味噌汁に御飯、從つて挨拶にも『御飯を召上りましたか』などといふが、北京では朝の挨拶に『吃飯了嗎』とは云はない『吃點心了嗎』といふ。つまり北京人の朝餉には普通點心を用ひ、お米の御飯は喰べない。

では、どんな點心を喰べるのか。その最も普通なものは麻花と焼餅、飲みものは豆腐醬、即ち豆乳である。麻花に關しては本誌昨年九月號にも記載された如く、焼餅は小型のお饅頭を押しつけて平べつたくしたやうなもの丶上に一面白胡麻をつけ、爐のうちで壺焼風に焼いたもので、この焼餅を二つぐらゐ、麻花は二三本、それを煖めた豆乳を啜りながら喰べる。いつまでも飽きない旨さで、ちやうど日本人が一年三百六十五日毎朝味噌汁で御飯を喰べて飽きないのとよく似てゐる。

この焼餅は、漢代既にあつた胡餅といふのがそれで、今日のやうな壺焼風な焼き方は唐の時代に發明され、今に至るまで朝餉の主食物とされてゐるのだから隨分長い歴史を持つてゐる。

麻花も焼餅も豆腐醬も、これらはいづれも買つて來て喰べるものであるが自家製の點心として面白いものは、前日の殘物をいとも巧みに整理して主食にあてることである。

例へば、前日の御飯が殘つたとすると、それを翌日の朝餉の點心としてお粥にするなり、或は俗に云ふ卵飯、即ち鷄子兒炒飯に拵へ直して喰べる。この鷄子兒炒飯は、胡麻油のやうな植物性の油でもよし、又ヘツトのやうな動物性の油でも結構、その油で殘飯をいため、程よき頃に鷄卵を割つて入れて攪拌し、それに葱を細かく切つて藥味に入れる。贅澤なものになると細かくきざんだハムや或は罐詰の蟹などを入れる。さうなると殘飯の方が遙に旨く北京の一日本人の家庭でこれを拵へてみたところ、子供が大變な悦びで、晝餉にも夕餉にも毎日せがんで母親を困らせたといふ話がある。

また前日の饅頭が殘つたとする。それをカマボコみたいに薄く切り、油で輕く狐色にいためると、トーストに優る美味な點心に一變する、といつたあんばいに、前日の殘り物を翌朝さまざまに工夫してお美味しい點心に拵へ直すのである。

既に點心といふからには、實は何でもよく、寒い冬の朝はやく焼芋を買つて朝餉の點心にあてることもちつとも珍らしいことではないし、また若し日本の大福餅のやうなものが假に北京にあるとすれば、鍋物ではあるが、恐らく朝餉の點心として悦ばれるに違ひない。

麪食の晝餉

晝餉は麪食、即ちメリケン粉を主材として拵らへた食物を主食とするか、若しくは麪食を夕餉に廻して、お米の御飯を主食とするか、その何れかを擇ぶのである。これが、北京人の一般的な習慣で、こゝでは、晝餉に麪食を主食とすることにして、お話をすゝめよう。

麪食とはメリケン粉を主材として拵へるもの丶やうに云つたが、貧しい下層階級の人達になると、さう〱毎日メリケン粉を使ふわけにはゆかないので、麪食とは云ひながら、實はメリケン粉に粟の粉などを混ぜたり、或は蜀

黍の粉に大豆粉を混ぜた雜合麪（これに對して純メリケン粉を白麪といふ）でいろ／＼なものを拵へて主食物としメリケン粉ばかりの色の白い麪食は、一週に一度か月に何度と數へるほどしか口に入れない。

尤もメリケン粉の市價が一袋二十何圓といふ未聞の高値を呼び、而も容易に手に入れ難い今日此の頃、同時に自肅節約にも依て、口のおごつてゐた上層階級の家庭でも、次第にこの雜合麪をも使ふやうになりつゝある。

然らばこの麪製主食物は、どんなものかと云ふと、ウドン即ち麵、餠、包子、饅頭、餃子――滿洲から移つて來た日本人はこの餃子を北京で臆面もなくギョウザなどと云つてゐる。誠に以て耻しい誤音である――などがその主なるものであるが、但しこれらのうち饅頭を除いた其他のものは、いづれも白麪でのみ拵へ得るもので、雜合麪では作れない。

雜合麪で拵へる饅頭（これは特に窩頭といふ）は、もとより白麪饅頭のやうに出來上りの白く綺麗なものではなく、舌觸りもモソ／＼して贅澤な人の口にはちよつと這入り難いけれども、實はなか／＼風味があり、滋養分も存外豐富である。だが、これは殆んど下層階級か若くは極く仕末屋な商家などの主食に限られ『吃窩頭』といふことは貧を意味し、また監獄では日常この窩頭を食べさせてゐるので『吃窩頭去』といふと、監獄入りといふ意味に諷されてゐる。

ウドン、即ち麵にはいろ／＼な種類があるが、そのうち上下を問はず誰にも悦ばれてゐるものは家常麵である。牛でも豚でも羊でも、その脂肪で甜醬といふ甘味の赤味噌をよくいためて脂肪を味噌の中に溶かし込み、それをウドンの上にかけ、更に千切りにした生の白菜やキャベージや大根や、或は輕くゆでた菠薐草やモヤシなどを入れ、混ぜて喰べるのである。喰べ方は決してお上品ではないけれども、美味滋養完備の主食品で、北京に來た日本人でこの家常麵を賞揚しない者は先づないやうである。蓋し麪食中の秀逸と云ふべきであらう。

故鄭孝胥先生は、五十になられてからお米の御飯を全廢し、その代りにお米の粥一碗と、小型な白麪饅頭を二つを三度々々喰べ、そして會ふ人毎にこれを勸めて居られたが、先生が滿洲國の國務總理時代、その官邸に勤務してゐる日本の憲兵さんや、運轉手などが鄭さんと同じく三度々々このお粥と饅頭をあてがはれたのには、いくら腹工合はよいといつても、これにはホトホト閉口したものである。

御飯の夕餉

晝飯に麪食を攝れば、夕餉には大抵お米の御飯にするのであるが、その炊き方が日本のそれとはいさゝか異つてゐて、次の二通りある。

その一つは日本流の炊き方と略ぼ同じなもので、これを燜飯と云ひ、他の一つは水加減に頓着なく、いゝ加減に水を入れて煮、ふきたてたらその汁をとり、八分程煮えたそのお米をセイロに移して蒸すのである。この方法を蒸飯といひ、好きこのみもあり、また米の質にも依るが、概ね小人數の家庭では燜飯を用ひ、多人數の家や料理屋などでは蒸飯にする。この蒸飯の炊き方は、古く漢の時代から既に行はれてゐたものである。

お粥のことども

點心の朝餉にも、麪食の晝餉にも、また御飯の夕餉にも、北京の人達は好んでお粥をよく喰べる。

そのお粥のうち、いちばん廣く上下老幼、何人にも愛好されるものは小米粥、即ち粟粥である。その美しい黃金色の稍ねつとりした風味はまた格別で、それに赤豆や乾棗などを入れたものは殊にお美味しいものである。それを啜りながら饅頭などを喰べるのは、お互の味ひが實によく調和してゐる。

小米粥に次ぐものは稀飯、即ちお米の粥で、御飯のときでも、三ばい喰べるところを二はいにして、一ぱいをお粥にするといふのが習はしで、身體の上からも又、節約といふことからも誠に結構な習慣である。

蜀黍の粉もまたお粥に使はれ、これを玉米粥といひ、殊に秋の蜀黍の粉はその香りに野趣が滿ち、更にそれにサツマ芋を輪切りにして入れて煮ると、元來が北京のおサツはとても甜味がゆたかなので、これを入れたお粥は、玉米粥にしてもまた小米粥にしても、程のいゝ甘さがにじみ出て、何ともいへぬ風味である。

日本では、お粥といふと何かしら病人の喰べもののやうに思はれ「お粥なんかおぢや第一力が出ない」など云ふが飛んでもない間違ひであらう。日本でも代用食の覓求もさることながら、二食主義とお粥の二項に就て中國の持つ生活習慣を研究することも無駄ではあるまいと思ふ。

娘子關

引田春海

「こゝはのろくていけませんね。」
「山ばかりですからね。」
前に坐つてゐた頓馬な顔をした商人らしい二人の男が、山西訛で話しながらすつかり退屈してゐる。石門を出た太原行の列車のなかである。地方の百姓やら商人やら華北交通の警務手やらが高原の乾燥した空氣にすつかりうだつてものを云ふのも大儀さうに、鼻をほつたり、頭を搔いたり、居眠りをしたり、なんとか氣分を紛はさうとしてゐる。そのなかにたつた一人の日本の女がゐる。三十六七位の仲居風な樣子の女である。女は、さういふ風な職業によくある下卑た安物の色氣を身につけて、お喋り屋らしい大きな口をもてあましてゐた。石門にでも行つての歸へりらしく、赤大根を澤山風呂敷に包んで持つてゐた。野菜物の缺乏してゐる山間のどこかの寂しい沿線の驛に住んでゐて、少數の日本人を對手にしながらこつ／＼小金を溜めてゐるのであらう。さういふ殊勝な心得が彼女にわざわざ石門から大根を買はせたのかも知れない。こゝらでは大根は一株二錢程高いのである。外にも一人女がゐる。六十餘りの支那の老婆である。いかにも丈夫さうな紺の木綿を着てゐるのであるが、その色はなんとも云へない好い色合である。洗へば洗ふ程光澤を增すあの手製の色彩である。頭には白と紺の交叉織の頭巾をかぶつてゐる。一介の田舍の老婆に與へられた地味で豐かな趣味性、勿論自然と合致した生活上よりの要求であるには違ひない。汽車が南張村に着くとどや／＼と百姓達が乘り込んできた。どれもこれも大事さうに住民證をぶら下げてゐるのが子供らしい。僕は、二人分の席をぶんどつてなか／＼讓らない前の男をつゝいて、一人の百姓に呼びかけた。
「お爺さん、坐らんかね。」
「あゝ、あゝ」
彼は持前らしい大きなさびた聲で答へて不格構な腰付で腰を下した。そしてぽかんと口を開けて早速居眠りを始めた。僕はこの時、殆ど喰ひ入らんばかりにこの老人の顏を眺めてゐた。種油のやうな褐色の皮膚で、殆ど鼻の原形を留めてゐないでこぼこの低い鼻、顏中にめり込んだ數多の深い皺、そして象の肌のやうに皮張つた皺の無數に割込んだ頸筋、全體の形を整へる爲に漸く奧深く存在する二つの小さな眼、僕は老人が汽車の動搖で眼を醒ました時その眼を見ることができた。それは異樣な黄味がかつた血走つた小さな眼であつた。僕が畫家であつたら僕はこの老人を畫かずにはゐられなかつたであらう。この老人を畫くといふことはとりもなほさず今の支那の百姓達の生活を、その儘に一層象徴的に表現することだからである。この老人は次の驛で降りていつた。車窓から溪流が眺められると皆は皆んに窓から首を出した。
「やあ、素晴らしい風景だ。」
「どれ、どれ。」
「あゝ瀧だ、瀧が見えだした。」
一沫の涼氣が車窓を撫でる。汽車が娘子關の寂しい驛に着いた時、僕は旅人の氣儘な自由さで、豫定した理由もなくこゝに降り立つた。
善良さうな中年の助役に聞くと、宿屋はまだ出來上つてゐないが、ひよつとしたら泊めるかも知れないと云ふ。その内汽車は出てしまふ。つまるところ、一泊を要することになつたのである。
「主人が歸つて來ましたら、こちらで泊つていたゞきますか、宿の方にお泊めしますか、はつきり致しますから、まあ、御飯をお濟しになつてゆつくりして下さいませ。」
親切な話好きらしいお神の對手で食事を濟してゐると、主人が歸つて來た。彼は外で何かがみ／＼小言を云つてゐたがそれだけ人は良さゝうながつちりした體格の男だつた。主人の一言で僕は宿の方に泊ることが決定した。聞けばこの夫婦は日本人として一番最初に娘子關にやつてきて、いろ／＼な苦勞の結果漸く旅館を開く運びになつたのだといふ。しかもその最初のお客が僕である。お神の自慢めいた話と、今日あたりひよつとしたら非常呼集がある

かも知れないと云ふやうな幾分緊張を要する話を聞きながら宿に行くと、主人が先に行つて待つてゐた。

「何、大丈夫ですよ、近くに兵營も有りますし、警察もそこですからね。」

主人はぶつきら棒に部屋の鍵を開けてくれた。四疊半の何の裝飾もない改造家屋の一間で僕は一夜を過すことになつた。窓を開けると二丁ほど先に溪流が流れてゐる。窓の下は小川である。小川を利用して隣に水車小屋がある。水車はどん／＼と響をたてゝ廻つてゐる。あたりは漸く夕暮である。宿を出て見ると娘子關の關所はすぐ間近に聳つてゐる。唐の昔、娘子軍が守つたここを、人々は無心に今も通つてゐる。ほんのりと涼氣をのせた風が吹いてゐる。僕は河畔を散歩することにした。水車小屋を望む高いところに一人の子供がぢつとうづくまつて對岸の山を眺めてゐた。僕が近づくと子供は振り返へつて僕を見た。無心な小さな澄んだ目だつた。それから子供はその儘默つて動かない。六つか七つほどであらう頭に小さな辮子をつけてその先を紅い紐でくゝつてゐるのが可愛かつた。

娘子關に通ずる道を挾んで前の小さな家から好い匂がしてゐる。香ばしい何かを焼く匂である。僕がその家に這入つてゆくと、三十四五でもあらう一人の瓢簞のやうに元氣のない瘦せた男が薄暗い部屋のなかで、メリケン粉を捏ねては圓くちぎつて棒でのばしてしきりに焼いてゐる。

「何を焼いてゐるのかね。」

僕が聞くと彼は元氣のない聲で

「火焼（フォーシャオ）ですよ」

と答へて物珍らしさうにつッ立つてゐる僕に椅子をすゝめてくれた。見渡したところ二坪ほどの狹い部屋にありとあらゆる物が置いてあつて一樣に黑く煤けてゐる。彼は僕の方を氣にしながらやつぱり焼いてゐる。

「いつ頃から、この商賣を始めたのかね。」

「十六年になりますかね。」

僕は十六年間も少しも變らない同じ型の火焼ばかりを焼いて、恐らくは彼が始めて焼いた時と技術的にも何等の進歩も無く勿論商賣の發展さへもない彼の境遇を想ふにつけ、彼の靑白い無氣力な顏が氣の毒になつた。

「少しは金も貯めてゐるだらうね。」

僕がさう云ふと彼は人の好ささうな笑ひを浮べて頭を振つた。

「生きてゐるだけですよ。」

僕が彼と話してゐる時、二人の闖入者がゐた。一人は大きな異常な格構をした若者、一人は小さな汚ならしい小僧である。彼等は僕を意識しながら隅の方でさかんにふざけてゐた。

「お前の家の者かね。」

僕は主人に訊ねた。

「さうぢあないんです、隣村の者なんですがね、毎日私んところに食物をねだりに來るんですよ。」

「家はあるのかね。」

「ありますとも、このちびの方は親爺もお母も元氣者でそりやよく働きますがね、たゞ子供がまるで諸を洗ふやうにゐるんですよ、そこでこのちびはどうしても外で飯を食はなければならなくなつたと云ふ譯です、それからこつちの大きな奴は……」

主人はさう云ふと例の異常な格構の大きな若者の方を指した。彼は僕達が自分の話をしてゐる樣子に氣付いたらしく、僕の方を見ると齒をむき出した不思議な笑ひを浮べてこれも異常に發達した節（フシ）くれた手でこゝを見てくれと云はんばかりに自分の耳を指しながら、何か異樣な呻きに似た聲を出した。

「啞なんですよ。」

主人が僕に注意してくれる迄もなく、僕は、その時この異樣な人物を了解してゐた。

「兄弟姉妹は皆普通なんですがね、ど

うしたものかこいつだけが唖なんですよ、親爺がこいつを嫌ひましてねどうしても家に寄せつけないんですよ。」

「ぢあお前が仕方無しに養つてゐるといふ譯かね。」

僕が善良さうな主人の話にいくらか感歎の情をこめて云ふと、主人は意外さうな表情をしてつけ加へた。

「いえ〳〵、殘り物があつたらやることにしてゐるだけですよ。」

「ぢあ、何も無ければ、どうなるのかね。」

「食べずに餓ゑるだけでせうよ。」

主人は濟ましてゐた。僕が主人の話を聞きながら、唖を眺めてゐると、唖は親しみをこめた眼付で僕を見ながら、さかんに寢る眞似をしてゐた。ちびが云つた。

「小父さん、お前何處に寢るかつて聞いてゐるんだよ。」

僕が例の宿を指してやると、唖は滿足さうに顏を歪めて、突然、異樣な叫び聲をあげ、手を振り脚を踏んで、店を飛び出ていつた。脚の甲が異様な大きさだつた。僕が主人のお世辭に大きなどんぶりにお茶をついでくれるのを辭退して店を出ると、外には暮れんとして暮れ難い夏の日の夕に、子供達が羣づて遊んでゐた。恰度そこには水母神の小さな祠があつて、子供の遊び場には恰好な場所である。その隣には興亞會館といふ安物の看板のある日本人經營の食堂兼カフェー兼××と云つたぐあひの店が一軒ある。恐らくは近くに工事をしてゐる土木業關係者が對手なのであらう。僕が出てゆくと、子供達が物珍らしさうに近寄つてきた。例のちびも一諸についてきた。唖が又いつの間にか現はれてぢつと僕を凝視してゐる。僕が彼を見返へすと、彼は例の奇妙な笑ひをする。つぎだらけの土布の藍衣が嚴丈な骨張つた體を包んでゐる。見たところ二十才前後の若者であるが智能の程度はほんの幼稚な子供であるらしい。子供達は面白がつて皆彼をからかふ。彼は本氣で相手になるけれども彼はたつた一つの智惠を大事に持つてゐた。彼は奇妙なことを子供達にやつて面白がつた。子供達の注意力をある一定の箇所に集中させて、その隙を狙つて對手を撲るのである。彼は自分の手で自分の眼を指す、子供が想はず彼の眼を見る、今迄彼の眼を指してゐた彼の手が、その時不意に延びて子供の頭をぶん撲る。彼は自分の大きな不格構な足を子供に見せる、子供は何氣なく彼の足を見る、その時彼の足が延びて對手の足を蹴上げる。一番年かさの少年が僕に説明してくれた。

「小父さん、可怪しいんだよ、あの唖は、いつでもあんなことをするんだもん。」

唖のもつ唯一つの智惠、彼の年齢にふさはしい唯一の智惠を彼はいつも後生大事に守つてゐるのであらう。だんだん薄暗くなると、子供達は水母神の祠に這入つて、神樣の上に跨つたり椅子に乘つかかつたりして屋根裏を探しだした。唖が僕の側に寄つて手で屋根裏を指しながら變な聲を出す。多分雀がゐるんだといふことを説明してゐるのであらう、僕が頷着いてやると明らか嬉しさうな眼の表情をする。雀はゐなかつた。子供達も遊び疲れたやうだ。暗黒の前のかすかな明るさが、娘子關を照らしてゐる。全ては靜寂な一瞬一瞬が續いて明日も大方快晴らしい。僕が宿に歸へりかけると、唖が近寄つてきた。そして宿を指しながら又寢る眞似をする。お前歸つて寢るのかと聞いてゐるのだ。僕が同じやうに寢る眞似をして見せると、彼は判つたやうに何回も首を振つて見せた。そして、どつかへ消えていつた。

僕はその夜なか〳〵眠れなかつた。今日一日のことどもが想ひ出されてますます頭が冴えるのである。落着いた娘子關の驛、善良さうな助役の顏、宿のお神と主人の二人の生活、愉しかる可き青春期をこんな寂しい驛に送つてゐるうら若い驛長の娘の顏、興亞會館の女共、それから百姓達のこと、守備の兵隊のこと、つぎからつぎへと絶ゆることなく浮び上つてくる。僕はフトンを被つた。それからどのくらゐの時間が經過したのか知らない。僕は不意にがた〳〵扉を叩く音に眼を醒まされた。僕は何か自分の胸を緊めつけられるやうな不安にかられた。とつさに匪襲を覺悟したからである。けれども僕のその考へは完全に間違つてゐた。扉を叩く大きな手、時に内部を覗くので硝子を通して見える異樣な顏、唖が僕を訪問してきたのである。しかも眞夜中にである。それを知つた時、僕は異樣な感動に驅られて、實のところ暫時何うすればよいのか判らぬほどぼうつとしてしまつてゐた。そして僕は唖があきらめて去つてしまつてから、漸く自分を正視することができた。

—唖の友情を無にした男—

僕はその晩、展轉反側して竟に睡らなかつた。

翌日僕は娘子關をたつた。

可園雜記

加藤新吉

凡十日の間、所謂血眼になつて借家を探した可園の人々は、五月九日から十日へかけて慌てふためきつゝ立退いて行つた。或は知人の家へ、或は旅館へ、多くは適當な家があるまでの假の家へ、後から逐はれてゐるやうな氣持で、落人の如く、敗殘兵の如く四散した。だが、お互に借家の心當りを知らせあふ人々であり、最後まで名殘を惜しむ人々であつた。「花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過行くに一樹の蔭に立寄りて別るゝ名殘も惜しきぞかし」と平家物語の作者は書いてゐる。「況やこれは憂かりし島の栖居」ではなくて、樂しかりし隣組であつたが、それでも「一業所感の身なれば先世の芳緣も淺からず」みたいな氣がしたのである。

一に華北交通の同僚達の友情のお蔭で、どうかと思はれた私の引越も一日で無事に終つた。極く內々にしてゐたつもりであつたが、意外に同情者が多くて、五十人からの人々がたまの日曜を棒にふつて助けて吳れた。前からの荷造を手傳つて吳れた人々や、その日雇つた勞役を合せると、約百人の人手を借りたことになる。自分達だけで始末をするといふ力も時日の餘裕もなかつたので致方なき次第ではあるが、つくづくあり難くも申譯なくも思ふ。これだけの力がもつと世の爲人の爲に使はれたら、と考ふれば、時節柄身の縮む思である。

午後六時、元住人一同、既にがらんとしてしまつた可園の、洋館の前庭に集つて示達を受ける。「此家屋ニ就イテ今回採ラレタル處置ニ對シテハ一切ノ批評批謗ヲナスヘカラス」といふ意味の一項を冒頭にして數項に涉る申渡があり「家屋ハ六時三十分ヲ以テ接收ス」といふに終り、家屋は直に其場に立會つた家主と稱する中國人に引渡された。元住人一同は、右の示達に違背せざる旨を認めた誓約書を渡されてそれに署名捺印を了し、住み馴れた可園の門を出た。こんな時、支那では累々として喪家の犬の如し、などといふ。門前の支那の彌次馬がさう思つて見たかどうかは知らない。

二三日後、家人は何かの用事で可園に立寄つたさうである。人なき庭に藤の花が咲いてゐたといふ。「昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや」といふところである。丹波の少將ならば「桃李言はず春幾たびか暮れぬる、煙霞跡なし昔誰か栖みし」と口ずさんで淚を流すところである。だが、家人はとたんに上海近郊の破屋の花を思出して、ぞつと身ぶるひがしたといふ。

話は支那事變の初、上海附近の激戰の後に溯る。私達がその戰跡を弔つたときは、既に一應の取片附が濟んだ後であつたが、それでも風腥き新戰場であつた。彈丸の爲に家といふ家は破れ藪の竹といふ竹は折れ、路傍には爆彈の跡と覺しき大穴が殘つてゐた。行く行く武勇を偲び英魂を弔ひ、殆ど人にも犬にも雞にも遭はぬ數時間の後に、私達は大場鎭の半壞の民家の白壁に斜陽が赤々とさしてゐるのを見た。その家の傍に、藤の花が垂れてゐたのである。かゝる時、人はこれを美しと見るよりも、すさまじきものに感ずるのである。

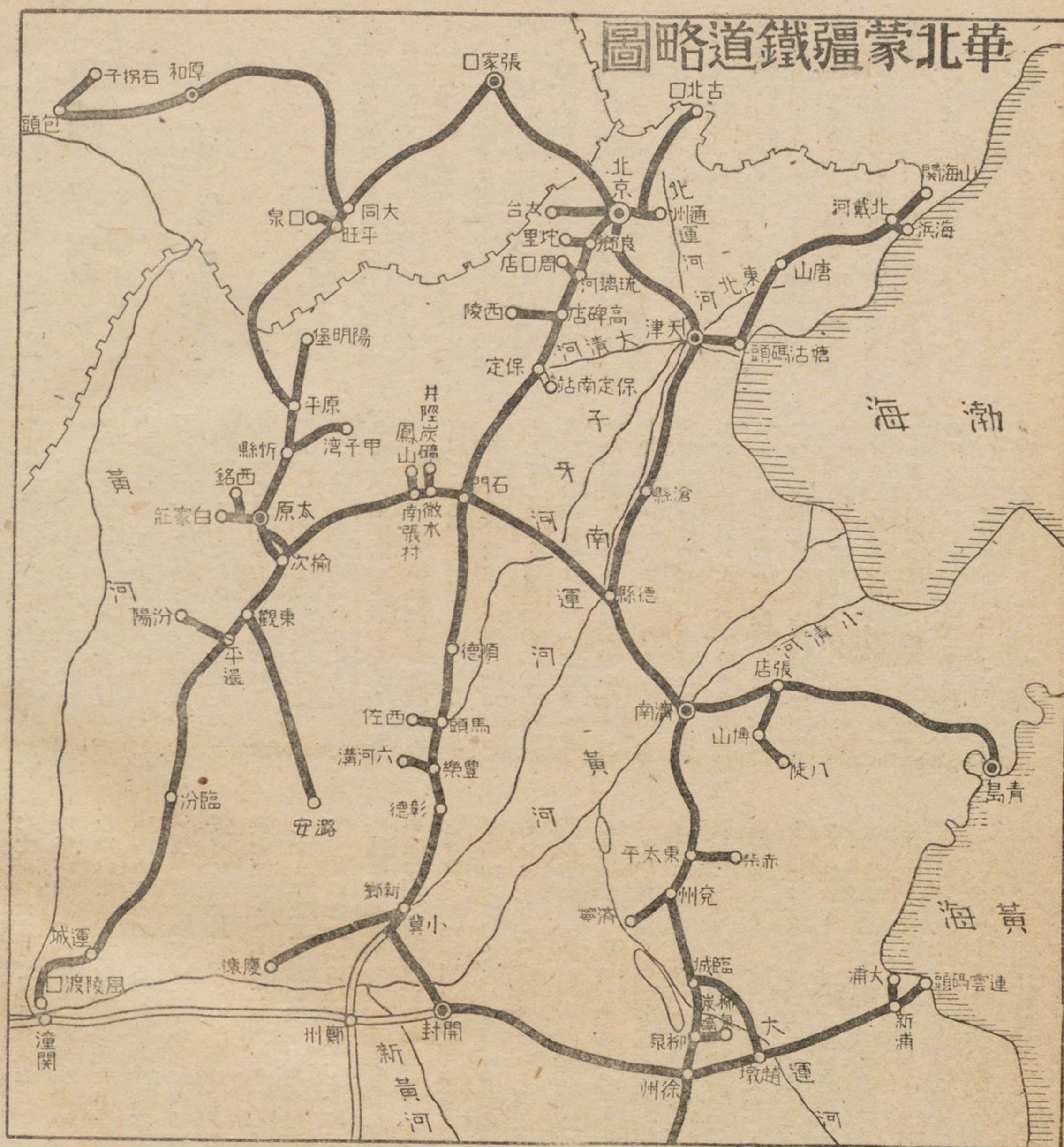
さもあらばあれ、可園三年有半の生活こゝに終る。可園雜記また從つて終る。かへりみれば行雲流水去つて跡なし矣。（筆者は華北交通資業局長）

第一書房
今月の新刊

☆大東亞戰爭の遂行に伴つて今や南方は文化的に經濟的に我々の大きな關心の的となつた。今月冒頭の新刊『**南方問題十講**』（一圓三十錢）は、この時代的要請に着目して開催された司法保護協會での南方問題講習會における講演のうち、**山田文雄・古野淸人・宇野圓空・井出季和太・深田益男・東光武三・國分正三・野村貞吉・岡野繁藏・三吉朋十**の十氏の講演を集めたものである。南方の經濟、文化事情の正確な解說書である。

☆また**高野正男**氏著『**北支の自然科學**』（一圓八十錢）は、現在大陸の農村に眞摯な生活を營みつつある科學戰士たる著者の北支の現實についての身をもつての記錄である。加ふるに豐富に挿入されてゐる寫眞とともに、讀者をして、北支の底の底までを探求させるであらう。

☆**山崎　斌**氏編『**島崎藤村文學讀本**』**春夏の卷**（一圓六十錢）も漸く出來。藤村先生の藝術の全貌を鳥瞰するに至便の名著として絕讚を博して居ります。

☆今回、先月刊行の**ド・クライフ**著**秋元壽恵夫**氏譯『**微生物を追ふ人々**』（二圓五十錢）は、第九回**文協推薦圖書並びに文部省推薦圖書**となりました。

華北蒙疆鐵道

京山線（北京─山海關）
京古線（東便門─古北口）
京漢線（西便門─小冀）
津浦線（天津北站─蚌埠）
京包線（豐臺─包頭）
膠濟線（青島─濟南）
石德線（石門─德縣）
石太線（石門─太原）
同蒲線（大同─蒲州）
懷慶線（新鄉─懷慶）
隴海線（連雲碼頭─開封）

昭和十七年七月十五日印刷納本
昭和十七年八月一日發行

八月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社（東東）（二〇四） 古川一郎
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二二
電話九段(33)二一四[illegible]
會員登錄番號 一一六五八八番

一冊定價（㊝）三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年七月十五日印刷納本　昭和十七年八月一日發行（每月一回一日發行）三十九號

北支　定價　三十錢